

龍谷 Ryukoku



龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY

2013 No.76



龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY

CONTENTS

- 01 巻頭特集 学長対談
内田 樹さん × 赤松 徹眞 学長
『これからの時代に求められる大学教育について』
- 05 5長ニュース
- 06 特集 アウン・サン・スー・チー氏
名誉博士号授与式・記念講演会報告
- 10 龍谷ミュージアム
- 12 青春クロースアップ
伏見わっしょい新党 武村 幸奈さん
地産地消で伏見を盛りあげたい!
農家と消費者をつなげる、謎の新党が誕生?!
- 14 龍谷大学学生有志の会 本郷 真理さん
自然のなかで生きるっておもしろい。
たくさんの農業経験を通して、将来は農家に。
- 16 国際文化学部 川村 優唯子さん
夢の先にあるもの。努力の先にあるもの。
- 18 World, Unlimited
Ryukoku Ambassador (龍谷アンバサダー)
高校生に国際交流の魅力を伝えたい!
外国人留学生と日本人学生による龍谷アンバサダー始まる。
- 20 Ryukoku News & Topics
- 26 Ryukoku Sports
陸上競技部 西川 凌矢さん
挫折を乗り越えて手にした日本一の栄光!
- 28 テコンドーサークル RATS 栗山 廣大さん
RATS のチームプレーがもたらした快挙。
サークルだからといって勝負でも練習量でも負けたくはない。
- 30 女子バレーボール部 堀崎 智恵美さん
元バレーボール・プレミアリーグ選手
現在、経済学部1年生。

- 32 学長対談
仁坂 吉伸 和歌山県知事 × 赤松 徹眞 学長
和歌山と龍谷の関係に新たな一歩。龍谷ソーラーパークいよいよ始動!
- 34 龍谷の至宝
『蜀江紋金欄』
明治天皇ご夫妻のお気持ちか織り成された格調高い吉祥文様
- 36 龍谷人偉人伝
写真家 井上 博道
司馬さんを心の師に
- 38 Ryukoku Academic
京都産業学センター
- 39 Ryukoku Extension Center
- 40 龍谷人
ナレーター 畑中 ふうさん
真面目にふざけて、白熱しても囁んじゃダメ。
バラエティ番組の裏を支える、ナレーションの世界とは。
- 42 株式会社 PHP 研究所 代表取締役社長 清水 卓智さん
いま何を世の中に伝えるべきか。
伝え手が真摯に考えれば、本はなくなる。
- 44 ミュージシャン (KYOTO JAZZ MASSIVE) 沖野 修也さん
世界中でプレイし、日本人のイメージを変えてきた。
めざすのは、音楽で偏見や先入観を変えられるDJ。
- 46 『BOOKS』新刊紹介
- 49 読者のひろば

教育関係者は、日本の教育の危機的状況を意識すべきだ!

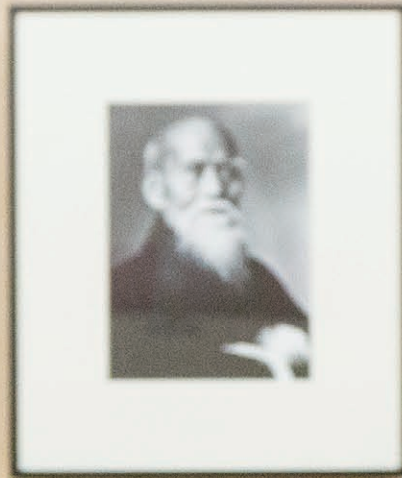
赤松 今日には神戸女学院で教鞭をとられ、また武道を通じても教育をおこなっておられる内田先生に、今日の大学教育が抱える課題や現状へのご意見をお聞かせ願えればと思います。

内田 かなり悲観的です(笑)。いまの日本の大学って、どの方向に向かえば良いかわからず、漂流している感じがするんですよね。教育行政は経済のグローバル化に役立つ人材を育てるなんて言っていますけれど、言っている側も自分達の戦略に長期性があるのかどうか、あまり自信がなさそうです。財界と政治家から教育行政への圧力にただ押されているだけのように見えます。文科省にしてみたら、学力低下という歴然たる事実があるわけですから、何かしなくちゃいけない。でも、文科省に教育再建の妙案があるわけじゃない。だからアリの的に、無意味だろうとわかっているけれど、数値的・外形的に目に見えるかたちの政策を起案してくる。文科省からくる通達を見ていると行間に絶望感が漂っているんですよ(笑)。ほんとうに、こんなことやってもたぶん無意味だと思うんですけど、ほかに指令できることがないので、とというつぶやきが聞こえるような(笑)。

いま大学生の学力が低くて、国際的な水準に達していないと言われていますけれど、それを大学の責任だと言われても困ります。高校を出たはずの学生が、中学生が知らなければならぬことを学んでいないんですから、局所的なところで思いつきな手を打つてもどうしようもない。これほどの危機的状況に直面しながらも、日本の教育関係者には本当の意味での危機感がない。一度足を止めて、30年後、50年後の教育成果をめざして、どうやって教育を生き延びさせるかを真剣に考えなくてはならない。いま長期的なスパンで考えないで場当たり的にやっていることは、悪いけど全部無駄になりますよ。

株式会社 龍谷大学の価値観を 大学に持ち込むのは危険

内田 大学の若い先生達は学務が多すぎて、研究教育に割く時間がないと言っています。大学に来て、学生に会っている時間よりも会議をしている時間の方が長いというのは学校のありようとしては根本的に間違っていますよ。ビジネスの場合は変化するマーケットのニーズに対応して、どんどん変化していくことが求められますけど、学校というのはそういうものではないです。惰性が強いんです。



いま長期的なスパンで考えないと、 日本の教育は 壮大な無駄をすることになりかねない。

現代日本を代表する思想家であり、合気道7段の武道家でもある内田樹さん。知と身体性をつなぐ体現者として、頭でつちかな現代日本に警鐘を鳴らし、しなやかでユニークな視点をもたらしてくれる内田氏の思想は、先の見えない現代社会の向かうべき方向を指し示すコンパスの一つとして多くの人に支持されている。今回の広報誌『龍谷』は巻頭特集として内田樹さんと赤松学長の対談をお送りしたい。テーマは『これからの時代に求められる大学教育について』。

合気道場、凱風館にて、両者畳に座し、和やかな雰囲気の中、しかし深く鋭い議論が交わされた。学力低下が叫ばれる日本の教育を救う手だてはあるのか、大学がいま果たすべき役割とは何か。いまだからこそ考えなくてはならない問題の、重要なヒントがたくさん散りばめられた対談となった。

テーマ

『これからの時代に求められる大学教育について』

龍谷大学学長 赤松 徹眞

思想家 内田 樹

対談

社会状況が変化したらから、人材需要が変わるからといって、カリキュラムをまるごと書き換えるとか、教師をまるごと入れ替えるとか、そういったことをする組織じゃないんです。日本の株式会社の平均寿命は7年です。それくらい短命の生き物なんです。それを基準にしてもらっては困る。大学というのは営利企業じゃない。4年間教育して、卒業時点で学力を計測して、はいおしまいじゃない。卒業した後でも卒業教育が続き、師弟関係は場合によ

て死ぬまで続く。息せき切って、ばたばたと今期の収益だけの株価のために目を白黒させる経済活動とはぜんぜん違うものなんです。だから、ビジネスの時間を大学に持ち込んだりしないんです。



赤松 大学はもつとゆつくり腰を構えて、学生を育てることにもつと自信を持たないとダメですね。そのためには大学がそれぞれの教育目標、理念について学内できちんと合意をとっていることが大事です。そうすれば教員も誇りをもって学生を教えられると思うんです。

内田 僕が神戸女学院に入った頃はまだまだ牧歌的な時代で、1年目の前期は授業が月曜と火曜だけで、火曜の夕方が週末で5日間休みだった。大学の先生ってなんていい商売なんだろうと思いました(笑)。「内田さんはまだ若いんだから、大いに研究してくれ」と言われて、委員とか役職もなくて、ひたすら勉強していました。だからいまの若い先生方を見ていると気の毒だね。授業のコマ数もずいぶん増えたし、なにより会議が多いでしょ。加えて短期間のうちに業績を出せという圧力がかかっていますから、論文を書くにしても、じっくり腰を据えて十年がかりの研究なんか、どの分野でももう許されなんじゃないですか。最近はこのテーマが流行っていて、それだと評価されやすいし、外部資金もとれるから、というような理由で研究領域が固まってしま。そうやっていまだとん日本の学術の奥

行きも厚みも豊穡性も失われてしまっていると思います。

赤松 時間がないので、先行研究を十分読みこなして先人の学識を継承するという点も希薄になっているでしょうね。論文発表をするにしても一つの論文を分けて、残りを別の学会で発表したりね(笑)。成果主義に迫られている側面もありますね。

内田 本末転倒ですよ。伸びやかな知性を大学の教員に感じることって、なくなりましたね。

教師の役割は、知性のトリガーを引くこと

赤松 現在、専門科目や教養科目を含めてそのあり方や充実策について、長きにわたって議論が積み上げられていますが、ことに大学の教育の質向上に向けての実践性を伴った方策が迫られています。先生の講義から受ける知性の魅力、あるいは先生の人格にふれることによつて、人間の根本的ありようへの問いに気づくということが大きな意味があると思います。私の学生時代にも、教養科目の講義のなかで、講義内容が広く、また知性が深く、教養の分厚さみたいなものに感銘を受けたの

を覚えていますよ。世の中にはなんとまあ、おもしろい研究をしている先生がいるものだなと思つて、その先生の著書を読みあさったり、講義に直接関係なくても枝葉のテキストも読んでみようと思わせてくれた先生が何人もいましたね。教師との出会いが、知性への切り替え、主体的な自学自習の学びへの転機になれば、大学の教育力の向上につながるのではうね。

内田 高等教育に限らず、基本的に学習というのは「自学自習」が本筋だと思うんです。教師の仕事とは、知性が発動し始めるための「トリガー」を引くことです。実際に子ども達自身の知性の発動を抑えているのは子ども達自身なんです。いまの日本社会にはテレビを発信源にした一種の反知性主義が蔓延していますから、子ども達はすぐに反知性主義イデオロギーに絡め取られてしま。知性になんかに価値はない、教養なんかゴミみたいなものだ、金を稼ぐ能力だけが重要なんだと朝から晩まで耳元でがなり立てられているわけですから、しかたがない。だから、彼ら自身を縛り上げているその反知性主義イデオロギーを解除するのが教師の最優先の仕事なんです。それさえ成功すれば、あとは乾いたスポンジが水を吸うように、子ども達は凄まじい勢いで学習を始める。僕はそういうケースを何度も見てきました。知識を得るといのがいかにわくわくすることか、知性が発動して、深く精密にものを考えようということがいかに愉快か、それを一度でも経験してもらえれば、それでもう十分なんです。学ぶことの快感は

にも根がない人」のことで。家族もいない、友人もない、その人を不可欠のメンバーとするいかなるネットワークにも属していない、そういう根無し草的な人間を企業は求めている。そして、大学はそういう人間を育成するという事業に加担している。「あなたがいなくなる」と困る」と周りの誰からも言われない人間になるべく自己形成しようというような教育事業になぜ大学が加担するのか、僕にはその意味がわからない。

しかし、いまの世界では、そういう人間が「機動性が高い人間」として評価されています。その逆に、日本の土地や共同体に深く根付き、その風土や生活習慣や宗教や文化や芸能に強い愛着があり、日本を離れては暮らせないといい人達が「一流の日本人」だということになっている。国民国家に帰属しない人間、クロスボーダーに浮遊している人間の方が、人間のありかたとして標準的なものだという大きな価値観の変革期を僕達は迎えています。いわゆる「グローバル企業」の存在様態をデフォルトにして、人間達も自己形成することを求められている。

赤松 しかし、浮遊する人間が、その一方で愛国心を吹聴していたりする事実も興味深いですね。これは裏表でセットとなっているような気もするんです。そのあたりの動きを冷静に見つめられるような人を育成しないといけないですね。

内田 本来のグローバル人材というのは、長期的な視点で世界に何が起こっているのかを

感染力の強い情動ですから、ひとりでも「知性が活性化して愉快になった」という子どもがいて、その影響はたちまち同心円状に広がってゆく。その段階までいつしまえば教師にはもうやることなんてないんです。

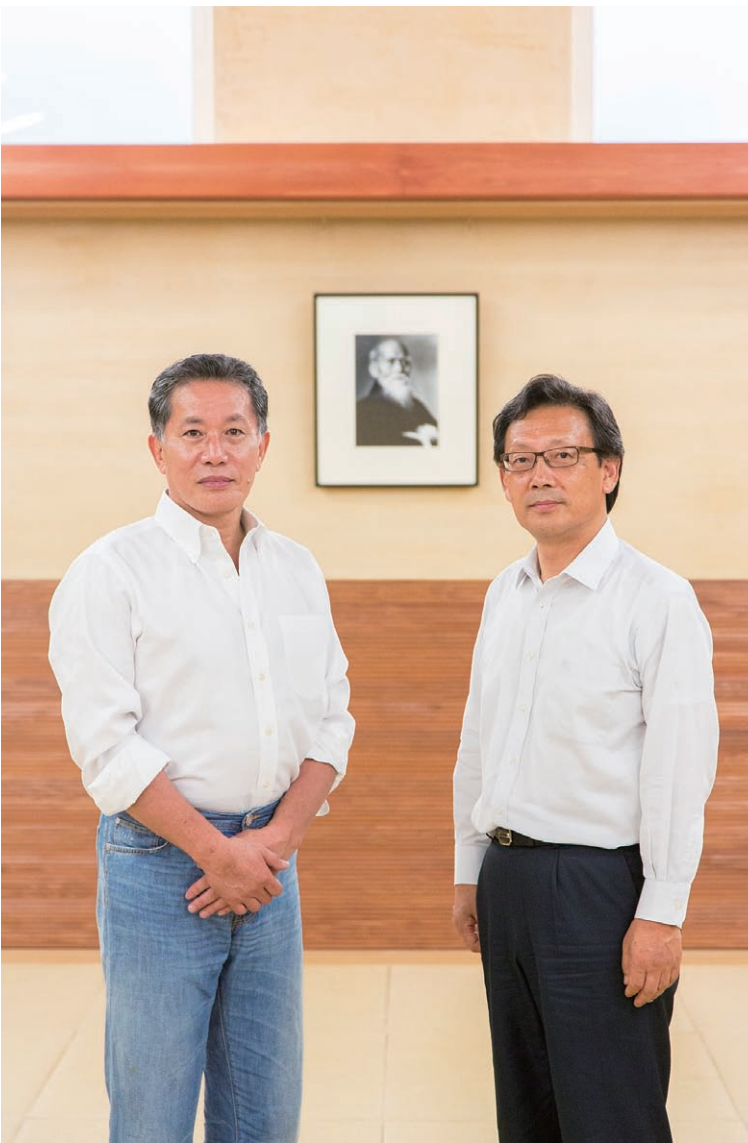
赤松 学生自身の潜在的に持っている力にきつかけを与えるということですね。教育のなかでは非常に大事なところですね。

内田 大学4年間のうちに「人でもいい」「自分の先生」と出会って、知性のトリガーが引かれることがあれば、それでいいんです。ただ、学生一人ずつ、なにがきっかけになって学びが起動するのかが違う。ある学生にとって刺激的な先生が、他の学生達にとつても同じように刺激的であるわけではない。どんなきっかけで学びが起動するか全員が違うわけですから、学校はなるべく多様な教育方法と多様な教育者をそろえておく必要がある。ばらけている方が効果的なのです。「下手な鉄砲も」です。これだけ用意しておけば、どれかは「当たる」だろうというくらい気持ちで学生の前に並べておく。あまりはつきり言う人はいませんが、教育というのは「歩留まり」が悪いものなんです。教えていてわかりますけれど、僕に出会ったせいで学ぶ意欲が発動したという学生は教えているうちのせいぜい1割です。9割は「外れ」です。僕がどんなに熱を入れて口角泡を飛ばして講義をしても、全く周波数が合わない学生はいる。こういう先生が最高、というような単純なモデルは存在しないんです。ビジネスマンは歩留まり率10%以下

赤松 どちらかというと同調性が強いようですね。

内田 イエスマンが求められているんです。私企業の収益増大に奉仕する「グローバルなイエスマン」というのはまるで形容矛盾だと思うんですけど、誰もそれに気づいていない。文科省のグローバル人材育成についての文章も経済競争の話しかしていない。国際政治に関しては一言も書かれていない。経済のグローバル化がどういう歴史的条件の下で起きた事象であり、それは誰を利し、どこの国の覇権を固定化するためのものかという問いそのものが「ないこと」にされている。他人がルールを決めたゲームに後から参加しておいて、「グローバル」もないもんです。

赤松 社会が要求しているグローバル人材に対して大学はどう対応するか慎重に検討しないと、非常に希薄な、空虚なものになってしま。うでしょうね。龍谷大学は2015年に農学部を設立するにあたって、現在瀬田キャンパスにある国際文化学部を深草キャンパスに移転しますが、これにより同学部を中心に「多文化共生」を実践的に学べるキャンパスを再創造します。移転によって、本学のグローバル化を牽引する国際交流拠点として、知性と活気にあふれたキャンパスにしていきたいと考えています。



というような馬鹿げた比率はあり得ないと言。うでしょうけれど、自分達のことを考えてくださいよ。小学校から大学まで十数年学校に通つても、「この先生に出会って自分の人生は大きく変わった」というような先生はせいぜい一人か二人でしょう。そんな先生一人もいなかったという人だっている。延べ数百人の先生に習つても、「この人が私の先生だった」と言える教師なんか、一人か二人ですよ。それからの「低打率」のゲームなんです。ですから、コンスタントに高打率が出せるような教育プログラムを作れと言つたって無理なんですよ。教師の9割は子どもにとつて「どうでもいい人」なんです。でも、これを保護者の方々に納得させるのは難しいですよ(笑)。

表層的な「グローバル人材」が世界中に蔓延?!

大学がおこなうべき

真の「グローバル教育」とは。

祖國に対して帰属感も忠誠心もない
グローバル人材

赤松 グローバルという言葉が最近頻りに聞

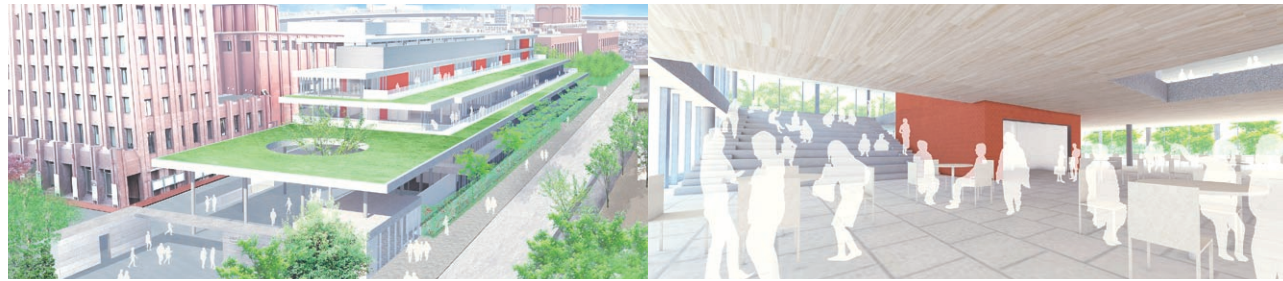
かれますけれども、言葉が独り歩きして、意味内容が人によつて多様であつたり、恣意的に使われたりしているようです。特に最近の経済界が言う「グローバル人材」というのは、すぐに現場で使える人材のことを指しているりしますよね。その概念の初期設定をわからずに使つてしまうと、極めて軽薄なものになってしまう危険性があるように思います。

内田 僕は「グローバル人材育成」反対派なんです(笑)。いま世間で言われている「グローバル化」というのは、国境を越えた企業活動に適応できる人間をつくれということなんです。英語ができて、体力があつて、タフ・ネゴシエーターで、異文化にすぐ適応できて、辞令一本で翌日から海外の支店や工場に飛べる人。場合によれば入社してから辞めるまで、ずっと世界各地をぐるぐる回つて、一度も日本に帰つてこなくても大丈夫だという。それが「グローバル人材」と呼ばれるわけですけれど、僕はそれはただの「根無し草」だと思います。だって、そういう人は親族共同体にも地域共同体にも属することができない。いかなる伝統的な文化や宗教儀礼や食文化にも愛着がない。「どこでも生きていける人」というのは「どこ

新たな「龍谷大学像」を掲げ、教育・研究・社会貢献など、様々な分野で第5次長期計画（5長）を進めています。

5長の柱として2015年に、国際文化学部を国際都市・京都へ移転。深草キャンパスを多文化共生の地として国際化していきます。一方、瀬田キャンパスには農学部を新設。食の安全・安心、食の循環やいのちをテーマに、国内的に問題となっている農業の疲弊や、国際社会での食糧不足などの課題に応えられる人材を育てていきます。

「多文化共生キャンパス」の実現に向けて国際化する深草キャンパス



多様な学びに対応し、多文化共生キャンパスにふさわしい、国際性豊かな施設として生まれ変わる新1号館

現在、深草キャンパスでは、国際文化学部のキャンパス移転（2015年4月）にあわせて、新たな教室棟「新1号館（仮称）」の建築作業が進んでいる。地上5階、地下2階建の新1号館では、教室や自主学習ブース、グループ討議が可能なエリアを用意するなど、学生の自立的な学びを支援する施設を多数設置する予定だ。これらのなかでも、語学学習支援スペースや留学生との交流ラウンジ、留学を志向する学生を支援する事務スペースなどは、とりわけ重要なエリアとなる。本学のグローバル化を推進し、多文化共生キャンパスの実現に資する施設を重点的に整備する計画である。

新たな国際化推進施設として「りゅうこく国際ハウス」をオープン

今年3月に開設した国際交流会館「りゅうこく国際ハウス」では、世界各国の留学生と日本人学生の共同生活をおこなっている。言葉や文化、風習が異なる学生同士がともに生活を送ることで、多様な価値観を受容できるグローバル人材の育成をめざしている。また同施設には、居住していない学生も来館できる国際交流スペース「さくら」を設けている。ここでは多様な交流プログラムを展開し、本学学生の一層の国際化を推進することで、多文化共生キャンパスの実現をめざしていく。



「いのち」を支える「食」を考え、「農」を学ぶ。瀬田キャンパスに「農学部」を新設



「食」と「農」を総合的に学ぶために、「食の循環」プロセスに対応した4学科を設置

2015年、瀬田キャンパスに開設予定の「農学部」は、独自の農学教育を通じて、人の「いのち」を育むために欠かすことのできない「食」とそれを支える人々の豊かな暮らしに貢献する「農」との二つの観点から、それぞれの役割や意義を体系的に結びつけた教育をおこなう。そして、農学を基盤とした専門的な見地から「食」や「農」にかかる諸問題を捉え、自然と人間社会のあり方について、多面的に考え、判断・実行できる力＝「本質を知り未来に立つ力」を養う。植物生命科学科・資源生物科学科・食品栄養学科・食料経済学科（仮称）の4学科を設置する計画である。

オープンキャンパスで、「農学部」紹介イベントを開催

7月から8月にかけて、瀬田キャンパス及び深草キャンパスでオープンキャンパスがおこなわれ、新しくできる農学部の紹介イベントが開催された。毎回100名を超える高校生が参加し、4学科の教員が身近な食品を用いて学科の特徴や学びの内容について講義をした。「農学部についてわからないことが多かったが、説明がわかりやすくてとても面白そうだった」「答えのないことを追究することに興味をもった」など、参加した学生から様々な意見が寄せられた。



最も効率のよい教育は、起居をともにすること
内田 世界的に成功している学校というのは基本的に教育活動の基本単位が小さいんです。オックスフォードもケンブリッジもそうですけども、成員達が起居をともにすることで、「ケ

あることを目標にするべきなんだと思います。日本の大学は海外留学する学生の多さを競っていますけど、それは倒錯していると僕は思います。「自分の大学ではないところで教育が受けられます」と当の大学が誇つてどうするんですか。話が逆でしょう。世界中からここに来たいと思わせるような大学をつくらないと。世界中から学生がめざしてくるような大学が本当の意味での世界性を持つているのだと思います。

いまや食の問題は崖っぷち
赤松 食の安全・安心への不安や世界的な人口増加による食糧不足など、「食」をめぐる様々な課題が世界的にも浮き彫りになってきました。こうしたなか、本学では、食の安全・安心をどう守るか、食の循環をどう考えるか、食糧危機にどう対応するか、これらの解決策

内田 伝統芸能の内弟子と同じで、師匠の抱持をされているうちに師匠が何をしたいのか、聞かなくてもわかるようになってくる。生理的に同調してくるんです。すると、芸を教えないなくても、師匠と思つたかや挙措が同じになってくる。対面的に見て覚えているんじゃないって、横に並んで呼吸を合わせているうちに師匠が憑依してくる。これ、日本の基本的な修行形態なんですよ。

赤松 私が学生の頃は深草キャンパスに二つ寮があつて、朝の動行に寮生は必ず参加しないといけないのでした。そこで先輩も後輩も一体となる感じがあつたのですが、いまはもう寮がないですからね。また寮を復活させたいですね。たしか丸山真勇さんの文章で、近しく先生の人格に触れることでしか、人格は習得できないというのを読んだことがあります。知識の伝達だけでは教育は成立しない。

赤松 ミストリーが生まれる。本当に大学教育を効率化したかったら、全寮制にして先生も学生も起居をともにして、「ご飯を一緒に食べて、というのが一番だと思います。

内田 先日起業支援をしている若い人と話したとき「最近若い人が起業の相談に来るけども一番多い職種は農業なんです」と教えてもらいました。ビジネスとして旨味はないけれど、それでも若い人達の農業への関心は高まっている。一つにはPPPで日本の農業は破滅するかもしれないという危機感を持っていること。一つには、あまりに企業の雇用条件が悪化したせいで、死ぬほど働いても年収200万そこそこで、かつかつ食うだけ。だったら、農業なら現金収入はなくても、食いつぶされることはないし、過労死することもない。雇用環境の劣化で、若い人達はそこまで追い詰められている。それがかえって農業志向を促している。もう一つ、固有の食文化を守らなくてはならないということがあります。世界中の食文化はいま均質化に向かっています。世界の中で、これは非常にリスクが高い。これまで人間集団はできるだけ主食として他集団とは違うものを選択してきました。同一作物に需要が集中すると、そこに抗争が起きるし、凶作だと餓死者も出る。主食を「すらし」おけば、隣の集団が主食にしているものに対して欲望を感じないし、飢饉のときは救済作物として「やむなく」食べることが出来る。食文化の違いというのは本来人類学的な安全装置なんです。農学部を始められるなら、どうしたら食糧を安定供給できるのか、世界的な視点で考

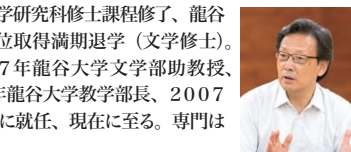
を提案し実現でき、国際的にも貢献できる農の専門家を育てたいという観点から学部名もあえて「農学部」として設立しますが、先生は農業への期待についてはどうでしょう。

赤松 いまはまだ準備段階です。先生の期待に応じてつくりあげたいと思います。本日はありがとうございました。

赤松 えてほしいですね。食の問題はもう崖っぷちの領域ですので、強い問題意識を持つて臨んでほしいです。その分野で突出した研究ができれば、それこそグローバルな課題に込めることだと思えます。世界的な規模の問題に対して堂々たるビジョンを提示できれば、それこそ世界中から人が集まってくるんじゃないでしょうか。

内田 樹・うちだ たつる
1950年東京生まれ。1975年東京大学文学部仏文科卒業。東京大学文学部助手、神戸女学院大学文学部総合文化学科助教授、教授を経て、2011年に退職。同年、神戸市に武道と哲学のための学塾凱風館を開設。現代フランス思想、比較文化論が専門だが、ユダヤ人問題から、フェミニズム、教育、戦争まで幅広いテーマに発言し、著書も多数。『私家版・ユダヤ文化論』で第6回小林秀雄賞、『日本辺境論』で第3回新書大賞、2011年に第3回伊丹十三賞を受賞。神戸女学院大学名誉教授。昭和大学理事。日本ユダヤ学会理事。合気道兵庫県連盟理事。合気道7段。

赤松 徹真・あかまつ つしん 龍谷大学学長
1949年奈良生まれ。龍谷大学大学院文学研究科修士課程修了、龍谷大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得満期退学（文学修士）。1984年龍谷大学文学部講師、1987年龍谷大学文学部助教授、1998年龍谷大学文学部教授、2005年龍谷大学学長、2007年龍谷大学文学部長、2011年4月学長に就任、現在に至る。専門は日本仏教史、真宗史、近代史。





<講演全文>

我々は常に理想に向かって行動し、不可能に挑戦しなければなりません

まず、名誉博士の学位を戴いたことに、そしてここでお話しさせていただき光栄に、感謝します。

私は、仏教の専門家ではありません。よい仏教徒でありたいと思っています。生涯を通じて仏教を学びたい、まさにいまも学びつつあるという段階です。ですから、一仏教徒として、仏教の教えに沿って生活をしているつもり一人の人間として、お話をしたいと思います。

ビルマにおける社会変革についてはできるだけ短く話し、皆さんからのご質問を受けたいと思います。外にいらっしゃるたくさんの方の皆さんにもご挨拶をしたいと思います。

と言いますのも、これこそが一つの仏教であると思うのです。仏教というのは、人々のために思うということ。若い方々がたくさん、外で私のことを待っていてくださっています。その方々のための時間を残しておきたい。それが私にとって、ある意味では講演よりも大事なことです。それが私にとっての仏教の実践なのです。

人々を慈しむ、他の人々の気持ちを大切にすることが仏教です。社会経済的な変革をもたらそうとしている私の国では、他人を大切にすることがまず大事で、それがなければ仏教徒とは言えません。なぜなら仏教は慈愛と慈悲の教えに基づくからです。この二つなくして仏教は語れないと思っています。

これこそが、ビルマに変化をもたらす最良の貢献であると考えます。我が国の変化は暴力や怒り、または復讐や、危害を加えたいという思いではなくて、ビルマの人々や世界中の人々に慈愛と慈悲の精神を広げることにあるのです。

ビルマは長年分断されてきた国です。真の平和を長らく味わっていません。独立して以降、怒りや戦いがなくなったことはありません。常にどこかに武装した反乱軍がありました。それに積極的に関わり、戦った人もいます。いまだに暴力で解決を図ろうとする人もいます。これが私達の国の状況です。これを変えるには、本当の意味での平和と愛を国全体に広めるには、まず、お互いを大切にすることから始めなければなりません。

ビルマでは、全ての人が仏教徒ではありません。様々な宗教を信奉する人がいます。こうした人々に等しく敬意を表し、仏教徒に向けてのと同じような慈愛と慈悲を抱くことが大切です。相手が同じ宗徒であるか否かで差別をするのであれば、真の仏教の道を歩んでいるということにはなりません。

政治と仏教のつながりについては、私の本「Freedom from Fear」の「民主主義を求めて」の章を読んでいただければ、はっきりとおわかりになると思います。基本的な要旨は、仏教は決して現代の民主主義の概念に反するものではないということです。その理由は、仏教は多大の価値を一人ひとりの人間においているからで、それはつまり人間と人権に価値があるということなのです。真に民主化した社会の基本概念は人権の尊重にあります。そこが仏教の教えと共通しています。人権の尊重と、実際的な価値は一人ひとりの人間に備わっているものなのです。

慈愛と慈悲は当たり前のことと考えてはいけません。私達に与えられるものは、当然自然に与えられるものなのです。慈愛は他人から買ったり、要求したり、強要したりするものではないと私はしばしば指摘してきました。慈愛を要求することさえしてはならないのです。自然に与えられるものでなければなりません。だから自然に受けたいと望むなら、あなたもまた自然に与えなければなりません。新しい民主社会であつてほしいと願う社会のメンバーの間で、仏教徒の価値を最重要視すべきです。

これは理想的にすぎる、不可能だと言われるかもしれませんが、我々は常に理想に向かって行動し、不可能に挑戦しなければなりません。奇跡としか思えないことでも達成するのだという確信を持つに至る精神を養わなければなりません。人間は最悪と同時に最善の可能性も秘めているという確信をもって前進すべきです。

そのために最善の道を行くか、最悪を取るかは選択の問題ですが、当然最善を選択すべきで、それに関しては、私は未来にたっぷり時間のある若い人に期待します。彼らには彼らの信じる価値を育む時間がたっぷりあるからです。

社会の民主的変革の過程で、仏教の役割は何かと尋ねられたら、その主な役割は、仏陀の教えどおり、慈愛と慈悲を実践することにより、我々は、達成したいと思うものを平和的手段により達成できると人々に確信させることだと私は言いたいのです。

狭い心は仏教の教えに反します。私達は成し遂げたいと願う変化に向かって堂々と歩むべきです。行政、経済、政治の未来に関して、楽観的かと尋ねられるなら、今日のビルマで起こっていることについては、我々は慎重を期した上で楽観的でなければならぬといつも言っています。しかし一個人として話を求められたり、人間の魂に訴えるメッセージを求められたら、私は楽観的だと答えるでしょう。なぜなら我々の誰もが我々の住む社会を変える資質を持っていると私は信じているからです。

大事なのは、深く関わることです。そして、望みどおりの社会変化をもたらすには覚悟が必要です。基本的には仏教の最高の価値を遵守しつつ、希望に沿った政治、社会、経済の変革をビルマにもたらしていきたいと思っています。ありがとうございました。



特集 アウン・サン・スー・チー氏
名誉博士号授与式・記念講演会報告

2013年4月15日 深草学舎顕真館にて

社会変化のプロセスにおける仏教の役割 — 日本の学生へのメッセージ —

2013年4月15日(月)、ミャンマー連邦共和国における非暴力民主化運動の指導者で、国民民主連盟中央執行委員会議長のアウン・サン・スー・チー氏が龍谷大学を来訪。深草キャンパスで、約2000名の学生達がスー・チー氏を出迎え、顕真館にて、名誉博士号の授与と本学学生向けの記念講演会が開催された。この名誉学位授与式と本学学生に向けた記念講演会の様子は、深草学舎、瀬田学舎、大宮学舎の各会場へライブ配信された。長年にわたりミャンマーの民主化に尽力されているスー・チー氏の講演に、多くの学生が熱心に聴き入っていた。

アウン・サン・スー・チー氏 略歴
1945年生まれ
ミャンマー連邦共和国における非暴力民主化運動の指導者、政治家
連邦議会議員、国民民主連盟中央執行委員会議長
1991年ノーベル平和賞受賞

日本やミャンマーの若者と話を
— 龍谷大学来訪の経緯

アウン・サン・スー・チー氏は、彼女の夫がイギリス研究留学生時代の1975年に、同じく研究留学中だった本学元教授・大津定美氏夫妻と出会って以降、家族ぐるみの交流を続けてきた。長い自宅軟禁の間、会うことはかなわなかったが、2012年、約26年ぶりにスー・チー氏と大津夫妻はミャンマーの自宅で再会。その折に、スー・チー氏に近々来日の意向があることがわかり、このことが大津氏より本学に伝えられた。

大津夫妻との親交がきっかけで、かつてスー・チー氏が研究者として京都に滞在していた頃に本学にもよく訪れてくださっていたこと。スー・チー氏の亡き夫でチベット学者のマイケル・アリス氏が1995年に本学で特別講義をおこなったことなど。これまでのいくつかの縁もふまえ、本学側は、スー・チー氏来日の折に本学来訪を願う赤松学長の親書を大津夫妻に託し、再度ミャンマーを訪問していただいた。スー・チー氏の来訪によって、仏教の非暴力の精神基盤を貫く彼女の姿勢を学生達に伝える機会となることへの期待があった。そしてスー・チー氏側からも本学訪問希望の表明を得、外務省との手続きを進め、今回の来訪がかなったものである。

来訪に先駆け、2012年7月に本学アフラシオ多文化社会研究センターの主催により、大津夫妻による特別講演会『アウン・



サン・スー・チーを語る「ミャンマー民主化の星」アウン・サン・スー・チーと京都」を開催。300名以上の市民や学生が参加した。また、同年11月にも同センターにて『現代ミャンマーの農業発展「イネ・コメからみる管区ビルマと少数民族山地」』などの研究会を開催し、ミャンマーへの関心を高めてきた。

来訪にあたって、スー・チー氏はマスコミの取材に対し「今回の訪問では日本の若い人達の話を聞くことを特に楽しみにしている」と話したという。学生達に語りかける時間をとったのも、世界のこれからを担う若者達こそを大切にしたいという意図があったのではないだろうか。



その姿は、
世界平和を望む人々を勇気づけてきた
— 名誉博士号授与

本学は、今回のアウン・サン・スー・チー氏の訪問を機に、同氏が龍谷大学名誉博士号を授与した。長年、ミャンマーの民主化の過程で偉大な役割を果たし、世界平和の構築に取り組んでいる人々を勇気づけた功績などを称えた。本学名誉博士号は、国内外を問わず社会的・文化的に著しく功績のある人に贈られるものであり、これまで5名の方々に贈られてきたが、2003年以来長らく授与がなかった。

赤松学長挨拶

並々ならぬご縁にて、今回本学にアウン・サン・スー・チー氏をお迎えできますことは浄土真宗の精神を建学の精神にかかげ、多文化共生キャンパスを標榜する私達にとって大変名誉なことであり、喜ばしいことです。アウン・サン・スー・チー氏の、不屈の精神でミャンマーの未来に希望を持ち、長年にわたり非暴力による民主化運動の指導者として果たされた偉大な役割、世界平和の構築に取り組んでいる人々を勇気づけた功績は多大了。この度の来訪を機に、龍谷大学名誉博士の称号を贈呈することとなりました。

私達は仏教を基軸とした教育研究を推進しています。そのような本学が、仏教が社会的に大きな役割を担うミャンマーとの交流を深めていくことには、大変意義があると考えています。今回の来訪を契機とし、ミャンマー

多文化共生の実現に向けて、
ミャンマーとの国際交流を推進

— ミャンマーとの国際交流施策を検討

本学は、長い歴史において、仏教を中心とした教育研究を展開しており、豊富な知的資源を有している。その本学にとって、アウン・サン・スー・チー氏の訪問を契機に、仏教が大きな社会的役割を担うミャンマーとの国際交流を促進し、高等教育機関との関係を深めていくことは、大きな意義があると考えられる。また、ミャンマーでは、昨今民主化の動きが加速され、アジア諸国のなかでも大きく発展することが期待されており、今後、日本との文化交流や経済交流が進展するものと推察できる。本学では、グローバル社会に応じた「多文化共生キャンパス」の創出をめざしており、同じアジアに位置するミャンマーを理解し、両国の友好関係を深めることにも大きな意義があると考えられる。これらの意義を具現化するため、本学とミャンマーとの国際交流を促進する諸施策を積極的に展開していく。

この国際交流を促進するため、ミャンマーの未来を担う多くの学生を積極的に受け入れて支援するとともに、学生・研究者を通じて学術交流を促進し、両国の友好関係をさらに深く発展させていくことを、ここに約束します。

記念講演後には、学生との意見交換の時間も設けられた。「あなたの生活における仏教の役割は」や「ミャンマーの若者に期待することは」という質問には「私の人生の目的は、世界をより良くしていきたいということ。仏教は常に、そんな私の一部です。若い人は、自分の権利ではなく義務を意識して生きていくべきです。しっかりと勉強し、のちのち国がその成果を恩恵として受けられるよう、がんばってほしい」と答えていた。



《具体的施策》

- ・ミャンマーにおける高等教育研究機関との「学術協定」・「学生交換協定」の締結
- ・ミャンマーからの受入留学生への支援（奨学金含む）
- ・ミャンマーへの「スタディー・ツアー」の企画
- ・その他、ミャンマーとの国際交流を促進するための施策

さらに、本学が近年、社会的責務として注力している自然エネルギーの研究開発についても協力する方針を決定。ミャンマーの農村での小水力発電プロジェクトなどへのバックアップを検討中である。

アウン・サン・スー・チー氏講演会動画配信

URL
<http://www.youtube.com/watch?v=YEJG4TqAD1c>

短縮 URL
<http://youtu.be/YEJG4TqAD1c>



争わず、融和する仏教の伝播はグローバル化のさきがけ

いりざわ たかし
龍谷ミュージアム 館長 入澤 崇

仏教の多様性を伝えたい

仏教美術を断片的に紹介する場合は数あれど、仏教そのものをテーマとして運営するミュージアムは世界でもほかに類を見ない。今年3年目を迎えた龍谷ミュージアムは開館以来、仏教が誕生してから現在に至るまでを様々な角度から紹介し、独自の切り口で仏教文化の魅力を発信してきた。

4月に館長に就任した入澤崇教授は、龍谷ミュージアムの展示方針を次のように語る。

「明治時代以降、仏教の教義的側面ばかりが注目され、現代では『わかりにくい』『自分には無関係』とネガティブなイメージを持たれることが多くなりました。しかし、古代に仏教がアジア一帯へとグローバル化した過程では、いつも異民族や異教徒との共存があり、文化や芸術にも素晴らしい影響を残していま

す。争わずに、融和する。このおらかな思想は、地域や宗教間の対立が絶えない現代社会にこそ必要だと思えます。」

仏教伝播の歴史は、互いを許容し、交流する人々の営みでもあった。龍谷ミュージアムで展示されている文化財からは、かつてアジア各地に生きたあらゆる民族の息づかいが聞こえてくる。

また日本の仏教についても、寺院や民衆時の権力者など、様々な立場から見た仏教行事や文化財にまつわる逸話を紹介。仏教を多角的に捉えることで、歴史の見方は大きく変化する。

「仏教の多様性を伝えたい」と話す入澤館長。今後は仏教に基軸を置きながら広く文化や宗教全般を見渡すことができる展示にも挑戦したいと言った。

「例えば、イスラム教に関する展覧会なども面白いかもしれませんね。イスラム教は古代に中央アジアの仏教勢力を駆逐して仏教寺院を破壊した歴史があり、仏教とは水と油のように考えられています。しかし、現在もシルクロードに残っている仏教遺跡を守り続けてきたのもまた、イスラム教を信仰する人々なのです。一見、共通点が無いと思われがちなのこの二つの宗教が互いに影響し合い、共存してきた歴史を紹介する展覧会が実現できれば素晴らしいですね。こんな展覧会は龍谷ミュージアムならではの展覧会です。」

今後の展覧会に関する情報などは公式サイト (<http://museum.ryukoku.ac.jp/>) で発信されている。龍谷ミュージアムの新たな動きに注目だ。

9月7日から始まる特別展「極楽へのいざない―練り供養をめぐる美術―」では、親鸞聖人が登場する以前から浄土信仰を背景におこなわれていた、阿彌陀如来の来迎をあらわした行事「練り供養」を、関連する仏像・仏画とともに紹介する。

「かつての日本人が持っていた臨終観に着目していただけたら」と話すのは、学芸員の石川知彦教授。

「練り供養」とは、臨終の際に阿彌陀如来とそご一行がお迎えに来てくださる来迎のシーンを表現した、言わば『再現劇』です。迎講、来迎会とも呼ばれ、現在も奈良県の當麻寺などで脈々と受け継がれています。練り供養が全国で盛んにおこなわれていた平安後期から鎌倉時代にかけては、先が見えない混乱の時代。人々が来迎を願う思いは相当強かったのでしょう。」

いまよりもずっと死が身近だった時代、地獄絵や極楽図のリアリティは私達の想像を遙かに超えるものだった。難解な仏教の教えをわかりやすく説くために生まれたこの行事は、民衆の支持を得て「仏教民俗」とも言える文化をつくり上げた。

練り供養では、まるで着ぐるみのように内側に人が入る構造をした仏像などを用いて、あたかも目の前で実際に来迎が起きているかのような演出がおこなわれる。会期中には現

在も岡山県弘法寺でおこなわれている弘法寺阿彌陀如来の特別実演もあり、その迫力を間近に感じることが出来る。

この特別展以降の展示も充実している。11月から始まる平常展第2期では「仏教の思想と文化―インドから日本へ」と題して「アジアの仏教」と「日本の仏教」を貴重な文物とともに紹介。会期を二つに分けて展示品の入れ替えをおこなう予定で、前半(11月9日〜12月23日)では富山県高岡市の勝興寺に伝わる寺宝を一挙公開する。後半(2014年1月9日〜2月2日)には、2013年に重要文化財の指定を受けた西本願寺所蔵「絹本着色親鸞聖人絵伝(6幅)」を公開。浄土真宗の歴史を示す名品の数々とともに展示をおこなう。

また、2014年は大谷探検隊のシルクロード調査が終結して100周年を迎える。龍谷ミュージアムではこの節目を記念して、大谷探検隊の活動を詳しく紹介する特別展を企画している。とくに、大谷光瑞師の命を受けて長期間チベットに滞在した多田等観と青木文教の二人に焦点を当てた展示は、これまで一般には知られることのなかった隊員の人物像に迫る内容となる予定だ。

仏教を糸口として文化、芸術、考古学、歴史民俗などあらゆる人間の営みを伝える龍谷ミュージアムの展示は今後も目が離せない。

〈特別展〉極楽へのいざない―練り供養をめぐる美術― 極楽浄土への思いをかたちに

いし かわ とも ひ こ
龍谷ミュージアム 副館長(学芸員) 石川 知彦



今後の展覧会予定

秋季特別展

「極楽へのいざない―練り供養をめぐる美術―」

会期：9月7日(土)〜10月20日(日)

(休館日：9月9日、17日、24日、10月7日、15日)

展示構成

序章 練り供養とは

第1章 のぞまれた臨終のかたち

第2章 練り供養いまむかし

関連イベント

特別実演

「弘法寺阿彌陀如来」

日時：10月12日(土) 13時30分〜15時30分

会場：旧柳植小学校(龍谷ミュージアムより徒歩約5分)

記念講演会

「練り供養のなりたち」

講師：関信子氏(本展監修・美術史家)

日時：9月14日(土) 13時30分〜15時

会場：龍谷大学大宮キャンパス 清和館3階ホール

「山陽の浄土教美術」

講師：中田利枝子氏(岡山県立美術館学芸員)

日時：9月23日(月)・24日(火) 13時30分〜15時

会場：龍谷大学大宮キャンパス 清和館3階ホール

平常展

「仏教の思想と文化―インドから日本へ」

第1部 アジアの仏教

第2部 日本の仏教

会期

第2期 11月9日(土)〜2月2日(日)

第3期 3月1日(土)〜3月30日(日)

(休館日：月曜(祝日の場合は翌日) および年末年始)

(12月24日〜1月8日)

地産地消で伏見を盛りあげたい！
農家と消費者をつなげる、謎の新党が誕生?!



伏見わっしょい新党
たけむら ゆきな
武村 幸奈さん
政策学部3年生 草津東高等学校出身

『伏見わっしょい新党』と書かれた、そろいの赤いTシャツで伏見の町に出現する謎の黨員達。見た目はみんなイマドキの大学生だ。彼らが町行く人々に呼びかけているのは、なんと…「伏見の美味しい野菜をどうぞ！」。

2011年にスタートした政策学部の学生が主体となって地域社会の課題解決に取り組む実践型課外プログラム、Ryu-SEI GAP（龍谷大学政策学部ローカル・アクション・プログラム）。きょうとNPOセンターが指定管理者として運営する『京都市伏見いきいき市民活動センター』（通称いきせ）を活動拠点として、自分達で社会の課題を見つけ出すところから、地域の人々と連携して解決策を実施するまでを体験するこのプログラムのなかで、いま熱い活動を展開しているのがこの「伏見わっしょい新党」だ。

いったいどんな活動をしているのだろうか。さっそく彼らが野菜市を開催しているという深草町家キャンパスを訪れ、副代表の武村さんにお話を伺った。

全然知らなかった、伏見のこと

「地産地消で伏見を盛りあげたい！そんな思いで私達は地元農家を応援する活動をおこなっているんです」

きっかけは、伏見の町で見つけた。3年前、Ryu-SEI GAPのメンバーで伏見を歩いていると、いなり寿司の発祥の地であること、酒蔵がたくさんあること、特産の京野菜がたくさんあることなど、伏見がとても食に恵まれた地域であることを初めて知ったという。そこで「食」という視点で地域を活性化できないだろうか考えた。

「伏見の野菜について調べているうちにわかってきたのが、こだわりの農業をおこなっている農家さんが、野菜の販路がなくて困っているという状況。消費者に安心を届けたい、おいしい野菜を食べてほしい。そんな強いこだわりと熱い思いをもって取り組んでいらつしやる農家さんが、消費者にもっと評価されたいのには、と思ったことから、有機農業、エコ

ファーム、特別栽培の認証をとっておられる農家さんに焦点を当てて活動をするようになりました」

作り手の顔が見える野菜達

農家は野菜を店に卸し、消費者はスーパーで並んでいるものを購入する。それでは農家のこだわりは伝わらないし、消費者がどんな思いで野菜を食べているのかも農家にはわからない。そんな状況を変えられないかと企画したのが『知食会（しよくかい）』だ。

「農家の方に、野菜づくりへの思いを語っていただいたものをビデオレターにして、伏見の大手筋商店街で放映しました。また道行く人にその農家さんのつくった野菜を食べてもらい、その感想をまたビデオに撮影して農家の人に見てもらおうというイベントが『知食会』です。野菜を食べてくださった方からは、伏見にこんな農家があったなんて知らなかった、どんな思いでつくられたのか知って食べるとよりおいしく感じるねなんてコメントが集まり、その映像を見た農家の皆さんはすごく嬉しそうでした」

また、有機農業への関心度合いを調べるために、100人アンケートを実施。消費者がどれだけ有機農業の知識を



持っているか、有機栽培やエコファームへの関心度合い、野菜を選ぶときに何を重視しているか、などを調べた。その結果わかったのは、高いだけで味の違いがわからない、本当に安心なのかわからないなど、農家の思いがやはり伝わっていないこと。虫が食って嫌、なんていう偏見があることもわかった。党员一同、その結果を見て、もつと有機野菜の良さを伝えるための活動をしなくてはと思うようになったという。

農家の努力を無駄にたくない！

「有機農業は農業を使わない分、自分で雑草を引いたり、虫を取るなど手間がものすごく増えるんです。土づくりにもこだわるので費用もかかります。それなのに、やっと収穫した野菜を食べてもらえないなんて、すごくもったいない。農家のなかにはマーケティングが苦手な方も多く、どうやって売り出せばよいかわからないと仰る方も。その部分を私たちが一緒に考えていけたらなと思っています。農家の方々は、最初は全く知らない学生が急にやってきたと、とまどわれたと思いますが、一緒に活動をするうちに「次はこうしたい」と相談してくださったり、「一緒にがんばろう」と言っていただけのように、少しずつ信頼関係もできてきました。私は『わっしょい新党』の活動を通して、農業に興味が増えたというより、がんばっている方の努力を無駄にしないためにはどうしたら良いのかということをはたす考えが生まれています。誰かのために何かできるということが嬉しいんですよ」

昨年の秋からは、自分達も実際に有機農業の野菜づくりを経験してみようと畑を始めた。場所は『いきせ』の庭だったところを掘り起こし、肥料を撒いて土からつくりあげた。初めて植えた茄子やキュウリは、思ったように育たず、農業

の難しさを改めて感じた。また、学生活動を支援する団体から助成金を得て、農家の素顔やこだわりを紹介するハンドブックを作成。深草町家キャンパスで月2回開催する野菜市などで配布している。この野菜市も、メンバーの地道なチラシ配布が功を奏したのか、地域での認知度も徐々にアップし、いまでは毎回完売するようになった。

卒業後は起業したい

この活動を卒業後も続けたいと、武村さんからメンバー3人は農業に関する会社を立ち上げようと計画しているそう。はじめは農家の思いを感じながら野菜を食べてもらえるレストランをつくり、そこで野菜を扱うことで農家の販路の安定をめざす。またほかの販路を見つめるお手伝いや、農家同士をつなげていくこともやっていきたいという。

「農家の方は当然、これから先もずっと農業を続けていかれるわけですから、私達も継続的な活動ができる体制を整えなくてはと思うようになりました。本気で取り組んでいる農家の方に対して、中途半端なことではできませんよ。自己満足で終わらせられないところまで来たと感じています。また、私達のように小さな活動をして成功しているところはたくさんありますが、なかなかそれが大きな動きにはつながっていません。私達ももし成功したら、ほかとつながってゆく仕組み、成功のモデルケースが普及していく仕組みをつくりたいです」

学生の学びの対象として農業に関わるだけでなく、将来農業で起業することも考えて取り組んでいる『わっしょい新党』。これからの武村さんらの活動が楽しみです。

自然のなかで生きるっておもしろい。
たくさんさんの農業経験を通して、将来は農家に。



龍谷大学学生有志の会
ほんごう まさみち
本郷 真理さん
理工学部環境ソリューション工学科3年生
滋賀県立玉川高等学校出身

「農業をしたい」。そんな若者の声を多く聞くようになった。その背景には、食の安全への意識の高まりや、自然環境問題への関心、または雇用不安など様々な社会的状況があると考えられる。またテレビでも『ザ！鉄腕！DASH!!』など若い人気タレントが農業に挑戦するバラエティ番組が高視聴率を獲得。また農業高校を舞台に若者の青春を描いたマンガ『銀の匙』が2012年のマンガ大賞に輝き、テレビアニメ化され人気を呼ぶなど、メディアにおける農業の取り上げ方も随分と変化している。それに伴い若者の農業へのイメージもいままでは随分変わったものになっているようだ。

理工学部3回生の本郷さんも、将来、農業を志す若者の一人。「龍谷大学学生有志の会」という団体を立ち上げ、畑で野菜を育てるほか、滋賀県が策定した「環境こだわり農産物」認証制度を若者にPRする活動をおこなうなど、様々な取り組みにチャレンジしている。

大好きな琵琶湖の水環境を守りたい

幼い頃から瀬田に住み、琵琶湖で泳いだり川で釣りをしたり、いつも自然のなかで遊んでいた本郷さんは、水が汚ないのが気になって、どうにかならないかとずっと思っていた。そして高校

生になって進路を選択するとき、滋賀県の環境改善に携わりたいと考え、龍大の環境ソリューション工学科への進学を決めた。「僕は滋賀の水辺が大好きなんです。独自の生態系。水の色、流れる河川の水面。ほかでは見られない自然が滋賀県にはたくさんある。でもそれを守っていく人は少ないように思う。それなら自分が先陣をきってでも守っていこう、そんな思いを持っています」

そんな本郷さんが立ち上げたのが「龍谷大学学生有志の会（以下、有志の会）」だ。きっかけは滋賀県が取り組む「環境こだわり農産物」をPRする委託業務をやってみてどうか、と大学の先輩から声をかけられたことだった。これは農業排水が琵琶湖の水質や生態系を悪化させないよう、農業を5割減らす農業を推進しようという取り組みで、この農法で作られた農産物を「環境こだわり農産物」として認証する制度である。本郷さんは、自分達のような若い世代にもこの取り組みを知ってほしいと「有志の会」を設立した。様々な学部から活動に共感して、何かしたいという志と行動力のあるメンバーが集まって、現在部員は15名。瀬田キャンパスで「環境こだわり農産物」の説明会・試食会を開催したり、大学の講義で説明をするなど、日々規模を拡大しながら活動を続けている。

本郷さん「環境こだわり農産物を広めるだけでなく、農業の知識を習得することで、食や地産地消の取り組みなどに関心を持ったり、視野を広げられる場にしていきたいと思っています。また活動を通して、社会人として必要なマナーや行動を身につけていくのも、目的の一つと考えています」

畑づくりを通して、堂町の人々と交流

そんな「有志の会」が力を入れている活動の一つが畑づくり。瀬田キャンパスの南に隣接する森を抜けると上田上堂町（以下、堂町）という小さな集落に出る。有志の会はこの堂町にある畑を借りて、自分達で野菜や蕎麦を育てているのだ。「僕は環境こだわり農産物をPRしていますが、自分たち

が農業をしたことがないのでは、人に教えたり広めることはできない、という思いから農業を始めました。季節ごとの野菜を育てることで、食べ物への感謝の気持ちや野菜づくりの難しさ、大変さを知ることが出来ます。そんな経験から、PRするときの言葉にも重みが増し、人の心に届くのではないかと思っています」

野菜はできるだけ農業を使わず、減農薬の難しさを感じながら育てることを選んだ。わからないことは堂町の農業の先輩方に教えてもらう。野菜は毎日管理しなくてはならないため、メンバーが交代で様子を見にいっているそうだ。また堂町の皆さんから町の歴史を教してもらったり、お祭りの神輿を担がせてもらったり、有志の会も収穫した蕎麦を打って地元の人に食べてもらったりと、交流活動も積極的にこなしている。

「堂町には若い人が少ないので、学生が来てくれると町に活気が出る、と町内の皆さんからも喜んでいただいています。有志の会のメンバーも、地域の活動に参加したことがなかったり、年配の方と話したことがないという者も多いのですが、新鮮な気持ちで取り組んでくれて、戸惑いながらも、その場をわきまえた行動や話し方などを学んでくれるのではと思っています」

本郷さんは、自分達の活動をもっとたくさんの方に体験してほしいと、野菜の収穫や蕎麦のふるまいをイベント化して他の学生にも参加を呼びかけている。

「自分達がいつも食べている野菜がどのようになっているか、蕎麦の花がどんなに綺麗か、このイベントを通して、みんなが身近な食にもっと関心を持つてくれたら嬉しいですね」

出会いのなかで、点が線につながっていく

本郷さんは「有志の会」の活動のほかにも、様々な活動を計画中だ。

「いま、釣りイベントを企画している滋賀大学の学生とコラボして、釣った魚で農業用の肥料をつくるという企画を考えています。ちょうど外来魚で困っている漁師さんの知り合いもいるので、三つを結びつけて何かできたらいいですね。魚の肥料を

使った農業の実験をして、卒論に書いたらちよっどいいかもなんて思ったり（笑）。これは実現できたら、龍谷大学と滋賀大学の学生がたくさん関わる交流の機会にもなりますし、学生達に環境にこだわった農業を知ってもらうよい機会になるのではと思っています。人を集められるし、自分の農業の知識も役立てられる。こんな具合に、点が線としてつながっていくのが面白いですね」

場所を問わず、興味がある人には会いにいって吸収したいという本郷さん。野洲や守山の農家を手伝いながら農業を教えてもらったり、NHKの「プロフェッショナル」という番組で見た千葉のカリスマ農家、浅野悦男さんを訪ねてみたいと意気込んでいる。

これからも自然のなかで生きたい

様々な活動で農業について学んだ本郷さんは、いつしか卒業後も農業をやってみたいと思うようになった。

「畑を始めてから自然のなかで生きるっておもしろいと改めて思ったんです。野菜は毎日様子を見てやらないといけないんですけど、世話をするほど野菜がよい表情になっていくんですよ。次はどんな顔を見せてくれるんだろうと思うと、毎日楽しみです。手をかけてやればやるほど心えくくれる、それが農業の面白さです。農業は化学・物理・生物学などいろんな知識が総合的に必要となるものだから、大学で学んだ知識も、いろんなところで活かせると思います。自然について学ぶことが答えのない勉強ですよ。視点を変えれば違う答えが出てくる、そんな学びがおもしろいと思います。だから卒業後は、農業に携わる仕事ができればいいなと考えています」

本郷さんの農業への熱い思いは、大地にしっかりと根をはり始めている。農家を志す若者が増えていっていると冒頭に述べたが、いまの若者はメディアに煽られた軽い気持ちではなく、しっかりと現状と未来を見据え、自分らしく生きる道の一つとして、農業を見ているようだ。本郷さんのこれからの挑戦に期待したい。

「夢に向かってがんばる」。言うのは簡単だ。「人生に無駄なことなど何もない」。わかっていても、報われるかわからないことに打ち込むのはしんどい。現実が見えてくるほどに、やる前から諦めてしまう人もたくさんいるだろう。しかし、そんなマイナス志向に陥る間もなく、ひたすら夢に向かって突き進んできたのが川村さんだ。彼女の夢はアナウンサー。「見ふつうの明るくてかわいらしい女子大生だが、彼女の行動力は半端じゃない。思いついたことは全て行動に移す。ここまでやる?というくらい、彼女はやる。さて、そんな川村さんの夢は叶うのだろうか。」

一日中テレビ局の玄関で待ちました

「アナウンサーになりたい人が集まるのはやっぱり東京です。自分も東京で勉強しないとほかの人達よりも上にはいけないと思って、六本木の有名なアナウンサースクールに入りました。家は京都なので、毎週金曜日になると夜行バスに乗って、土曜日の2時間の授業を受けに行きました」

関西から来ている生徒は川村さんだけ。まずはじめにつまづいたのは、関西弁のイントネーションだ。アナウンサーの採用試験では、一言でも関西弁が出たら落とされてしまう。そこで川村さんは、半年間は家族とも標準語でしか話さない決めて、実行した。

「標準語を聞き慣れない親からは気持ち悪がられていましたね(笑)」さらに、スクールでできた東京の友達と週に数回は電話でニュースを読み合い、関西弁が出るたびに指摘してもらって矯正したという。

また、川村さんはテレビ局が主宰するアナウンスセミナーにも参加。これ自体が誰でも受けられるものではなく、書類選考で1000人ほどのなかから80人ほどに絞られるという厳しい倍率のものだ。川村さんはその倍率を突破し、セミナーを受けることができたが、もちろん彼女はそれだけで満足はしない。

「テレビ局に通いつめました。2週間に1回は行っていましたね。現役のアナウンサーと出会ったら、「アナウンサーになりたい川村優唯子と申しますが、お話伺えませんか?」って。通っているうちに顔も名前も覚えてもらえるようになって、はじめは話してくれなかった方も、少しだけなら話きてあげると言ってくれたり、スタジオのなかに案内してくださった方もいました。あるときは、アナウンス部長さんが「アナウンサーの生の話を聞くといいよ」と現役の女子アナの方を紹介してくださったことも。アドバイスを伺ったり、応募用の写真選びも手伝っていただきました。5000人も受けにくるので、目立ってなれば、人と違うことをしないとダメなんです」

東京在住のアナウンサー志望の人だつて、ここまでではないだろう。でも川村さんは、距離の不利をいともせず、バイトをしてお金を貯めては、夜行バスで東京へ向かった。「あるときはスクールの講師に、「いま私、赤坂にきているのですが、個人レッスンをしてもらえませんか」といきなり電話をかけたっていました」

この体当たり、なかなか真似できることではない。笑顔の極意

笑顔の極意

そんな川村さんの憧れは、いま大人気のフジテレビの加藤綾子アナウンサーだ。いつも自然体で、笑顔がステキなところが好きだという。川村さんは、そんな笑顔の秘密を探ろうと、様々なアナウンサーの出ている番組を録画して研究。そこである発見をした。「人は爆笑するとうしろでも見苦しい顔になってしまいます。爆笑してもステキな笑顔を持つフジテレビアナウンサーに魅力を感じます」。さらには、直接アナウンサーに笑顔の秘密を聞いてみる。

「フジテレビのイベント司会のオーディションに受かり、憧れのフジテレビアナウンサーに会うことができました。そのとき、笑顔について聞いてみたら、やはりみんなも自分の表情を研

究して、誰からも共感してもらえる笑顔をつくり出したと仰っていたんです。つくりあげた笑顔が自然に見えるまで努力しているんですよ。また他局のアナウンサーにも笑顔の工夫を聞いてみました。そこで教えてもらったのが「奥歯をぐつと噛んで絶対離さないで笑う」という極意。そのやり方をすれば、誰でもある程度かわいく見えるし、男性もハンサムに見えるんですよ!笑顔は直せるんです」

それから川村さんは、アルバイト先のスターバックスコーヒーでも、お客様にあわせた表情で接客をするように心がけた。そんな努力は伝わるもので、お客様から「最近違うね」などと声をかけられるようになったという。笑顔、表情への関心は、大学での学びにもつながった。

「異文化コミュニケーション論の授業で、相手の表情から感情を読み取る、という心理学的な講義があったんです。それがおもしろくて、心理学に興味が生え、バラエティ番組によく出ている心理学者の方の本を読みました。その方は慶應義塾大学の講師もされているので、講義を聴こう!と思いついて慶應まで行ったこともあり。すごく人気のある講義だったので、部外者は入れなかったんですけどね(笑)」

知りたい、と思ったら、あらゆる手段を使って知ろうとする。川村さんには、特別な人脈があるわけでも、人と違うスキルがあるわけでもない。あるとしたら並外れた行動力とまっすぐな気持ちだけだ。

夢、叶わず…。しかし努力は何かにつながる

それでも、社会は厳しい。川村さんは現在、まだ一つもアナウンサーの内定をとれてはいない。最終選考まで残ったテレビ局もあったが、ダメだった。不合格の通知には、何がダメだったのか理由は書かれていない。ただ不合格という事実が伝えられるだけだ。あたり前だが、たくさん努力すれば必ず報われるというものではない。しかし、川村さんは他の業界でも就職活動を続け、内定を5社からもらった。いずれも業界トッ

夢の先にあるもの。努力の先にあるもの。



プクラスの企業の総合職だ。

「内定をいただいた会社で評価されたのは、アナウンサーをめざしたことで培った力でした。私、どの会社でもびつくりされるくらい大きな声で挨拶をしていたんです。そのことや相手に伝わるような喋り方を見てもらえたみたいです」

また、川村さんがんばりを知っている人から、いまでも司会などの依頼やオーディションの紹介が来るという。

「フットサルリーグの女子大生レポーターに応募したり、今度はサッカー協会のイベントの司会をやりま。私がアナウンサーをめざしている話を聞いて、いろんな人が声をかけてくれるようになったんですよ。すごく嬉しいことですね。それから、アナウンサースクールに通ったことで、東京で就職したいとも思うようになりました。私はこれまで京都を出たことがなかったのですが、東京は自由で自分の可能性を広げられるところ

だという気がするんです。街を歩いている個性豊かな人が多くて楽しいですね。関西に比べると、例えば服装一つとっても、みんなと同じ目立たない色を選んで自分で自身を縮こませていたけれど、渋谷ならショッキングピンクの服だつて着て歩けそうです!」

アナウンサーになりたい、その夢はいろんなかたちで川村さんを変えたようだ。やつぱり、「人生に無駄なことなんかはない」。この使い古された言葉を信じて、分厚い意味に変えられるか、それは自分次第だ。

いまの川村さんの夢は、何歳になっても笑顔の素敵な人であることだそう。

「爆笑したときにこそ、ステキな笑顔をしている人。そんな大人になりたいです。そして、自分の持つ可能性をもっともつと広げていきたいと思っています」

かわむら ゆいこ
川村 優唯子さん
国際文化学部4年生 龍谷大学付属平安高等学校出身

World, Unlimited

「多文化共生を展開する大学」を標榜する龍谷大学。
2015年4月には国際文化学部が深草キャンパスへと移転し、国際化へ向けた取り組みがますます加速する。高い志を持ったグローバル人材を育むため、言語や文化の壁を越えて世界と連携する取り組みが現在、各学部で精力的におこなわれている。

高校生に国際交流の魅力を伝えたい！
外国人留学生と日本人学生による
龍谷アンバサダー始まる。



Ryukoku Ambassador 龍谷アンバサダー

アルト・ヨアヒム さん

国際文化学部 4年生 ドイツ出身

つちだ さ ゆ み

土田 紗由美 さん

国際文化学部 4年生 滋賀学園高等学校出身

国際文化学部で新しく始まった、国際交流の試み「Ryukoku Ambassador (龍谷アンバサダー)」。これは龍谷大学で学んでいる海外からの留学生と、高い英語能力を修得した日本人学生を、滋賀県内の高校へ派遣し、高校生に国際交流の魅力や楽しみ方についてレクチャーをおこなうというもの。世界各国からの留学生約180人が学ぶ特徴を活かした社会貢献として、地域に密着した新たな国際交流のスタイル確立をめざしたいとの思いから始まった。大学の留学生が直接高校へ出向いて交流する形として注目を集めている。

その第一弾が、6月20日、近江八幡市の近江兄弟社高校にておこなわれた。今回この役をかってしたのは、ドイツからの留学生アルト・ヨアヒムさんと日本人学生の土田紗由美さん。ともに国際文化学部の4年生だ。アルトさんは、中学生のときにドイツで放映されていた日本のアニメ「セーラー



ビールの違いについて紹介するアルトさん



高校生と交流する土田さん

ムーン」に心奪われたことをきっかけに日本に興味を持ち、3年前に日本へ留学。現在はアニメを通して日本の社会と文化について勉強している。一方、土田さんは高校2年生のときにニュージーランドに約1年留学した経験を持ち、現在は国際文化学部の英語専門コースPEC(Professional English Course)で、英語を通して様々な文化や社会問題について学んでいる学生だ。そんな二人に龍谷アンバサダーを務めた感想を聞いた。

文化の多様さを知ってほしい

アルトさん「私はいろんな交流に興味があり、機会があればやってみたいかと思っていたので参加しました。近江兄弟社では6月20日と27日の2回に分けて、各1時間くらい英語だけで説明をしました。参加した高校生は、1年生七人で、みんなこれから留学予定のある生徒達です。行き先や期間は人によってまちまちで、米国に1年とかオーストラリアに短期留学などでした」

土田さん「私も高校生のときに留学したので、同じような高校生のために少しでも何かできたら、と思って参加しました。私も近江八幡市に住んでいるので、近江兄弟社は身近な学校でもありました」

アルトさん「私はドイツの文化について紹介したいと思って、ドイツ全体として一つの文化があるのではなく、地方ごとにより異なる文化があるということをお伝えしました。

ドイツ語というのは一つだけ、地方によって方言がかなりあること。これは関西や東北弁のような感じですね。それからドイツの名産品、ビールも地方によって味や製法が全然違うし、飲むグラスの大きさも違うんです。西の方だと200ミリの小さなグラス、私の出身地のバイエルン州は1リットルのグラスをつかいます。高校生はドイツといってもステレオタイプなイメージしかなかったと思うので、興味をもって聞いてくれました。英語で全部説明しましたが、内容は理解できたようです」

土田さん「留学してまず大変なのは文化が違うこと。私もニュージーランドで、バスが時間どおりに来ないとか、学校が2時頃には終わってしまうことに驚きました。初めて留学する高校生は、やっぱり怖いと思うんです。ナーバスな気持ちのなかで、日本と外国を比べてしまうと留学がしんどくなってしまう。だから、行く前から心構えとして、絶対に文化は違うものだと思っておけば、少しは気が楽になると思うんです。比喩に、その国の文化にどどんと触れていって楽しんで、と伝えました。また海外でのコミュニケーションの取り方も、知らないことばかりになってしまうことがあります。過去の私もそうでしたが、日本人はシャイなのでなかなか自分からみんなの輪に入れません。それに日本人って、リアクションをあまりしない。相手の意見を聞くだけで終わってしまおうと、反応がない、つまらないと思われてしまいます。何でもいから自分なり

の答えを返したり、質問したりして会話をつなげれば会話も盛り上がるし、いろんな意見が広がります。それが国際交流の楽しさでもありますね。ちよつとでも早い段階から、自分から積極的になれるよう、背中を押してあげたいと思って話をしました。私はニュージーランドに行つてから「Yes」「No」をはっきり言うようになりまし、あなたどう思うの」と言われたとき、しっかりと意見を言うようになりました。わからなかったらわからないとはっきり言えば、みんな説明してくれました。日本でもそうしろとは言わないですが、せめて留学先ではいつもの自分を少し変えて、言いたいことを言つて、やりたいことをやつてこれたら楽しいと思います」

土田さんは、自分の留学時の写真をスライドにして見せたり、ニュージーランドのハカという先住民のダンスの映像を見せるなど、事前準備もしっかりとして臨んだという。また日本から持つて行った方がよいものなど、具体的に役立つ情報も思いつくかぎり伝えた。レクチャーが終わると、高校生達の「みんなてハカのポーズで写真を撮ろう」という提案で記念撮影。楽しい時間となったようだ。留学の先輩二人の実体験に基づいた話は、これから留学を控えた高校生達にも心強いものだったに違いない。

なお「Ryukoku Ambassador (龍谷アンバサダー)」第2回は、9月に滋賀県立米原高校でおこなわれることになっている。今後の展開が楽しみだ。

高知県と龍谷大学が就職支援に関する協定を締結



赤松学長と尾崎正直高知県知事

2013年8月、龍谷大学は「高知県と龍谷大学との学生Uターン就職促進に関する協定書」を締結した。

これは高知県と連携することにより、龍谷大学に在籍する高知県出身の学生に対する就職支援などをおこなう。また龍谷大学の教育、研究、就職支援に寄与することで高知県の活性化を図る。今回の協定により、龍谷大学と自治体との就職協定は8県目となる。

高知県内企業の多くが、採用意欲があるにもかかわらず、優秀な人材確保ができないことが課題となっている。そこで地域活性化方策として、県外大学に進学した高知県出身者の県内へのU・Iターンを促進し、産業人材の質的・量的確保を図るため、自治体との連携による就職支援事業に積極的に取り組んでいる龍谷大学と、本協定を締結するにいった。

滋賀県と大津市の連携会議を龍谷エクステンションセンターで実施



左より赤松学長、嘉田由紀子滋賀県知事、越直美大津市長、佐藤副学長

滋賀県知事と大津市長が「滋賀県と大津市の共通の課題」について協議をおこなうトップ会談「県市連携会議」が8月26日(月)、瀬田学舎で開催された。

本会議は、「観光振興」や「子育て支援」などをテーマに年数回開催されている会議。今回は、びわこ文化公園都市を中心とした大津市東南部地域(瀬田・田上・上田上地域)や草津市の一部地域を含む滋賀県南部地域における産業振興の可能性について、立地企業や産業連携共同研究に取り組むベンチャー企業、大学における産学連携の取り組みなどの現状を視察し、協議をおこなう目的で開催された。本学からは赤松学長のほか、佐藤副学長、和田RECセンター長が同席した。

当日は、県市連携会議に先立ち、RECホール内の視察が実施された。インキュベーション施設であるレンタルラボの見学や入居企業の事業紹介などがおこなわれ、その後の県市連携会議では、滋賀県、大津市それぞれの施策を紹介。続いて本学の社会貢献活動や、2015年に開設を予定している農学部などの説明がおこなわれた。説明後の懇談では、滋賀県知事、大津市長より、ベンチャー企業の育成や農学部に関するコメントが数多く、本学に対する関心と期待の高さがうかがえた。

2013年度第1回 東日本大震災ボランティア活動報告



灯籠流しのお手伝い



灯籠流しのお手伝い



最終日みんな集まって記念写真

2013年8月12日～16日に宮城県石巻市雄勝にて、学生30名による復興支援ボランティアがおこなわれた。

雄勝地区の灯籠流しに関わる作業全般のお手伝いをメインに、地場産業の支援として硯スレートを磨く作業や、子ども達が遊ぶキッズスペースのガラス片などを取り除く清掃作業をおこなった。

どの作業も炎天下で厳しい作業だったが、みんなで協力しながら一生懸命作業に打ち込んでいた。また、活動の最終日には、社会福祉協議会を訪問し、「これからのまちづくり」についての話を伺った。ここでは、学生が現在、大学で学んでいることの意味や、将来の職業選択について考える、良い機会にもなったのか、活発に質問も出ていたようだ。

今回で雄勝での活動は、通算5回目になる。そのため地元の皆さんが「また、龍大生が来てくれたよ」と喜んでくれて、昼食のときにはスイカやトマトを差し入れてくれたり、気さくに声をかけてくれたりした。また、作業の合間に、地元の方から震災当時の話や、灯籠流しへの思いなどを聞き、実際に自分達でその海辺を歩いたりしていた。被災した建物が撤去され、更地が広がる風景に当初、学生からは「被災地であることの実感がもてない」という声が出ていたが、地元の皆さんとの触れあいのなかで、少しずつ実感が高まっていったようだ。

「風景は一変した。このあたりには家がたくさんあったが、今は更地ばかり。灯籠流しは、自分達に残された唯一の原風景だ」という地元の方々の話を聞き、学生達は、この幻想的な光景に込められている地元の皆さんの深い思いに気づく。被災によって失ったもの大きさと、自分達が果たしている役割について改めて考えるきっかけになったようだ。

灯籠流しは、人手を多く必要とする。被災前は、地元の人達が、灯籠を一つの家庭で三つ以上作り、灯籠流しをしていたらしい。今年は、仮設住宅の皆さんが800個、学生を含むボランティアと地元の有志で1000個作り、合計1800個を海に流した。人口が減り、高齢化率が60%を超えるこの地域で、この催しを地元だけで運営するのは非常に厳しいようだ。しかし、地元の原風景を残し続けることは、地域再生にもつながると学生達は気づいていたようだ。

地元の僧侶が、灯籠流し直前におこなわれた法要で、「ボランティアの若者がこうして来てくれるだけで、雄勝が元気づけられる」と言ってくれた。同じ場所に通い続けると、地元の人達と顔の見える関係になれる。この意味は大きい。来年もまた雄勝へうかがいたい。

京都市「学まちコラボ事業」に龍谷大学から2事業が認定



門川大作京都市長から認定証を受け取る、「みらプロ」代表川上友貴さん

京都市と大学コンソーシアム京都が協働でおこなっている「学まちコラボ事業」に、本学から2件の事業が採択された。

「学まちコラボ事業」は、大学と地域が「コラボ」して、まちづくりや地域の活性化につながる事業を京都市が認定するもので、平成25年度は33件の応募があった。

本学が認定された事業は、みらいの環境を支える龍谷プロジェクト（略称「みらプロ」）の『深草 SOSUI（疏水）物語2013』とNPO法人深草・龍谷町家コミュニティの『とびだす、キャンパス！@深草町家』の2事業。

みらプロは2年連続の認定。両団体とも京都市伏見区を中心に、地域の課題解決や活性化に向けて活動をおこなう。

学校法人龍谷大学 100% 出資の事業法人「龍谷メルシー株式会社」を設立



龍谷メルシー株式会社事務所内の様子

学校法人龍谷大学は、同法人が設置する学校などの教育研究環境をサポートする事業法人「龍谷メルシー株式会社」（龍谷大学 100% 出資）を、今年2月に設立した。

龍谷メルシー株式会社へ間接業務を委託することにより、龍谷大学の組織・業務のスリム化、教学の充実と物品の一括調達や業務の一括発注によるコスト削減を図る。

事業法人名の「メルシー」は、その語源から感謝・慈悲などの建学の精神に通じる意味もあり、この精神のもとに様々な事業に取り組んでいく。

龍谷大学は 2020 年夏季オリンピック・パラリンピック日本開催を応援!



2013年9月8日、2020年夏季オリンピック・パラリンピックの東京での開催が決定した。これまで龍谷大学は、東京都及び東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会と協定を締結し、招致活動を応援してきた。学内にポスターを掲示し、のぼりをたて、招致用のピンバッチを学生・教職員に配布するなど、招致機運を盛り上げた。

浜村ヘッドコーチ就任。オール龍大でAリーグ昇格をめざす!



就任会見で抱負を述べる浜村コーチ

昨秋はBリーグ4位という結果で終えた龍大ラグビー部。そこで今回新体制として本学OBの浜村裕之コーチを迎えた。「去年の不本意な結果を踏まえ、今以上に強くなるために気心も知れている彼に声をかけた」と大内監督。

二人はAリーグでともにプレーした先輩後輩の仲。浜村コーチは日本人で初めて、世界最高峰のラグビーリーグである SUPER12 のアナリストを務め、プロの雰囲気を知る人物である。「何か力になれればと思い引き受けました。Aリーグ昇格をめざしサポートしたい」と抱負を語った。

「オール龍大」というスローガンを掲げた龍大ラグビー部。選手だけではなく指導者や保護者、そして学生が一丸となり勝利をめざす。チームのめざすところは今年こそ悲願のAリーグ昇格。逆襲を誓い闘争心全開で走り出す。

浜村裕之（はまむら・ひろゆき）大阪府出身。龍谷大学経営学部経営学科卒業。94年にヤマハ発動機株式会社に入社し選手としてラグビー部に入部。01年に同ラグビー部のテクニカルコーチに就任。その後、日本代表 U21 ワールドカップイングランド大会テクニカルコーチを務めるなど、ラグビー界に貢献した。12年にオーストラリア協会ハイパフォーマンスアナリストとして活躍。13年6月に龍谷大学ラグビー部コーチとして就任。

小野選手、ユニバーシアード堂々の3位・銅メダル!



ユニバーシアードでの小野選手

2013年7月にロシア・カザンで開催された大学スポーツのオリンピック「ユニバーシアード」で、柔道部の小野彰子選手（経営学部3年）が、女子57 kg 級で3位・銅メダルを獲得した。2月にブルガリアでおこなわれたコンチネンタルカップ・ソフィアでの、2位・銀メダルに続く快挙である。今年の経験を糧にして、さらなる活躍が期待される小野選手。将来日本代表としてオリンピックメンバーに選ばれる日も遠くはないかもしれない。彼女の今後の活躍から目がはなせない。

<小野選手のコメント>

この度は応援していただきありがとうございました。あと一步のところでお力およばず、3位という結果で終わってしまいました。しかしこのような大会でメダルを持って帰ることができ本当によかったです。

小野彰子（おの・しょうこ）愛媛県立八幡浜高等学校出身。昨年の講道館杯全日本柔道体重別選手権大会女子57 kg 以下級で5位入賞を果たし、全柔道連盟B強化選手。2月のヨーロッパオープン・ソフィア大会（ブルガリア）の57kg 以下級で準優勝。

理工学部 近藤倫生准教授が 平成 25 年度科学技術分野の、文部科学大臣表彰若手科学者賞を受賞



◎近藤 倫生 (こんどう・みちお) 准教授
所属：理工学部環境ソリューション工学科
学位：博士 (理学)
研究分野：理論生態学
受賞研究課題：生物群集ネットワークの構造と維持メカニズムの研究

<近藤准教授コメント>

私はこれまで、たくさんの種類の生物がこの地球上で共存できているのはなぜか、という問題に答えようと研究を続けてきました。今回、これらの研究成果を評価していただき、大変嬉しく思っています。私が生態学の研究を始めたのは、母校の京都大学で学部3年生の時に理論生態学者の東正彦さん（故人）と出会い、数理モデルを使った生態系の研究のおもしろさに気づかされたことがきっかけでした。龍谷大学理工学部は、東正彦さんや数理生物学を日本で始められた創始者の一人、寺本英さんが教鞭をとっておられた場所です。私の尊敬する先生方がおられた龍谷大学で私自身も研究を進められ、また、賞をいただけたことは私にとって特別な意味があり、大変感慨深いです。生物多様性の崩壊が叫ばれ、生態系保全の必要性が高まる現代において、生態学は歴史ある基礎科学であるのみならず、重大な社会的な意義を担っています。たくさんの若い研究者が、この生態学の世界に興味を持ち、新たに足を踏み入れ、未解決の問題に取り組んでくれることを願っています。

本学理工学部環境ソリューション工学科の近藤倫生准教授が、平成25年度科学技術分野の、文部科学大臣表彰・若手科学者賞を受賞した。

本表彰は、科学技術に関する研究開発、理解増進などにおいて顕著な成果を収めた研究者の功績を讃え、研究意欲と科学技術水準の向上に寄与することを目的として実施されているもの。若手科学者賞は、萌芽的研究、独創的視点に立った研究など高度な研究開発能力を示す顕著な研究業績を上げた、若手研究者を表彰するものである。

今回の受賞は「生物群集ネットワークの構造と維持メカニズムの研究」に対するもの。近藤准教授は、生態系に多様な生物種間関係が存在することが、自然のバランスを保つ鍵であることを世界で初めて突き止めるなどの研究成果をおさめ、その内容が米国科学誌「Science」（2012年7月20日発行）に掲載されるなど、その研究活動が注目を集めている。

生態系にはたくさんの種類の生物種がともに生活しているが、これらの生物種は互いに無関係ではない。食べー食べられる関係や互いに助け合う相利関係などの種間相互作用を通じて、互いに影響をおよぼし合っている。したがって生態系は、多様な生物種がたくさんの種間相互作用のリンクでつながった、ネットワーク（生物群集ネットワーク）として捉えることができる。

近藤准教授は、自然生態系で実際に集められた生物群集ネットワークの実証データを解析してその特徴を明らかにしたり、自然生態系の振る舞いを模した数理モデルを開発・解析したりすることによって、自然生態系において多様な生物種の共存を可能にしている「自然のバランス」の仕組みを明らかにしてきた。

主な研究業績

- (1) M. Kondoh (2003) Foraging adaptation and the relationship between food-web complexity and stability. Science vol. 299, p. 1388-1391.
- (2) M. Kondoh (2008) Building trophic modules into a persistent food web. PNAS vol. 105, p. 16631-16635.
- (3) A. Mougi and M. Kondoh (2012) Diversity of interaction types and ecological community stability. Science vol. 337, p. 349-351.

龍谷大学深草町家キャンパスの開所式を挙



赤松学長筆による「深草町家キャンパス」看板を披露



門川大作・京都市長による祝辞

新たな地域交流拠点となる龍谷大学深草町家キャンパスの開所式が2013年5月22日、深草町家キャンパスでおこなわれた。

深草町家キャンパスは、建築基準法の適用除外規定を活用した全国初の条例である、「京都市伝統的な木造建築物の保存及び活用に関する条例」適用第1号として保存建築物に登録されており、一部を除き改修工事が終わったため、開所の日を迎えた。

開所式は、門川大作・京都市長や赤松徹眞・龍谷大学学長をはじめ、地元議員や自治連合会長、大学関係者ら約50人が出席。赤松学長は式辞で「本学の教育・研究活動の成果を地域に還元することで、地域社会に開かれた大学としての役目を果たし、また、その活動成果から、地域と大学がともに発展していきたい」と、深草町家キャンパス開設の目的を説明した。次に臨席した園城義孝・学校法人龍谷大学理事長は「本学の教職員や学生が、地域の方々と一緒に手を携え合って、地域社会が抱える諸問題や諸課題の解決にともに取り組んでいくことを大いに期待している」と挨拶した。

また来賓を代表し、門川京都市長は祝辞で「龍谷大学は地域との連携を進められており、ありがたく思っている。親鸞聖人の精神を建学の精神とし、370年も学びを絶やさなかった歴史ある龍谷大学にはぜひ、町家を活かし、日本の伝統文化を世界に発信してもらいたい。国際文化学部の移転も予定されており、地域の発展に力を貸してほしい」と深草町家キャンパスの活用に期待を寄せられた。

開所式終了後におこなわれた除幕式では、赤松学長の筆による「深草町家キャンパス」の看板が披露されると、参列者から大きな拍手がおこった。

短期大学部が卒業生の社会福祉士国家試験受験支援を開始



短期大学部では、卒業生の社会福祉士国家試験受験支援を始めた。

今年度は、8月3日に、社会福祉士受験支援セミナーを実施。新カリキュラムの科目を中心とした勉強法や、合格者の体験談から学ぶ勉強法などの内容でおこなわれ、受験をめざす方相互の交流・情報交換などもおこなわれた。

当日は10名の卒業生と短期大学部教員3名と少人数であったが、東京アカデミーの講師による受験対策講座や合格者の体験談などに、卒業生は熱心に耳をかたむけていた。

今後は、1月の受験に向けて、メールでの情報提供や情報交換をおこなう予定。

2014年度以降も社会福祉士受験支援セミナーを実施しますので、社会福祉士国家試験受験をめざす方はご連絡ください。

短期大学部卒業生社会福祉士受験支援係 sw.support@human.ryukoku.ac.jp

挫折を乗り越えて手にした日本一の栄光！

陸上競技部
にしかわ りょうや
西川 凌矢さん
経済学部3年生
京都府立桃山高等学校出身

写真提供 龍魂編集室



日本学生陸上選手権大会で、見事大会新記録で優勝した西川凌矢さん。数ある陸上競技のなかでも過酷さでは群を抜く3000メートル障害において、体調を維持しながら記録を伸ばしていくことは至難の業だ。今大会で成し遂げた快挙の裏側には、西川さんが1年前に経験した大きな挫折があった。

優勝タイムは8分53秒52。自己ベストには届かなかったものの、大会新記録の快挙だった。今大会の好成績は、昨年の雪辱を果たすことにもなった。ちょうど1年前の同大会では、試合前の自己ベストランキングでは1位だったにもかかわらず、試合結果は最下位(30位)。ほかの選手との実力差から「優勝はもうろん、内容(タイム)が求められていたレース」だっただけに、西出監督やチームメイトもかける言葉がなかったという。

先頭を走る選手の背中を見つめながらスパートをかけた、ラスト150メートル。「力を出し切った」と感じたが、ゴールラインを駆け抜けたその瞬間にも自分の順位ははっきりわからなかった。スタンドからわき上がる歓声は自分に向けられたものなのか……。ついさつきまで目の前を走っていた選手に追いついた手心はあつた。しかし、1位でゴールできた確信はなかった。

「なにも考えず、がむしゃらに走りきったラストスパートでした。ゴール直後には、ゼッケンを回収するスタッフの方に『僕は何位でしたか?』と聞いたりして、ずいぶん取り乱していましたね。そのうち電光掲示板に順位とタイムが表示されて、自分が優勝したことを知ったんです」



大会後、しばらくの間は練習にも身が入らず、落ち込む日々が続いたという。「練習が結果につながることを信じられなくなっていたんじゃないか。『今日はあんまり走りたくないな』と思う日もありました。でも、前向きな気持ちになったのもやっぱり練習のなかなんです。大会の2カ月後におこなわれた合宿を機に『理屈はともかく、まずは走ることに集中しよう』と切り替えることができました。もう二度とあんなにつらいレースは経験したくありません。でも、陸上競技についていかに精神力が大切かを学ばせてくれた、かけがえのない経験にもなりました」

自分との戦いを乗り越えて

3000メートル障害は、設置された水濺と四つのハードルを越えながら、トラックを周

回する過酷な競技だ。練習、試合中を問わず怪我や転倒事故なども多く、体力の消耗は想像を絶する。陸上選手にとってコンディショニング調整はもつとも重要な課題なのだ。日本学生陸上選手権大会では好成績をおさめた西川さんも、その1週間前に開催された全日本駅伝関西予選会では体調不良もあって、ゴール後に熱中症で倒れ病院へ搬送されている。

「最大の敵は自分ですね。大会前の体調管理なども含めて、自分自身を律する精神力がなによりも大切だと痛感しています。でも、いまから思えば1週間前に倒れたことで日本学生陸上選手権大会では『ダメでもともとだな』と負い気がなくなつたのかもしれない」

伏見で生まれ育ち「龍谷祭には毎年参加。小学校の頃から龍大に行きたいと思っていた」と言う西川さん。自主練習は子どもの頃から遊び場だった鴨川の河川敷だ。「ほかの大学とは違い、龍大には陸上部専用グラウンドがありません。瀬田のグラウンドで練習できるのは週に3回程度ですから自主練習を充実させることが重要。そういう意味では、自宅から鴨川まで3分、大学までは7分の、いまの環境に感謝しなくてははいけませんね」

高く掲げた目標に向かつて自分を高めていく

「卒業後は実業団に所属することができれば」と夢を語る西川さん。そのためにも日々のトレーニングを積み重ねて、コンマ1秒ずつ

記録更新に向き合っていきたいと話す。「実業団、日本陸上選手権、オリンピックと上を見ればきりがなく競技ですから、いざなりトップ選手と肩を並べるなんて無理。いまの僕に大切なのは、地道に少しずつ成長して身につけた力を本番で出し切ることだけ」ともかきいまは9月に控えている全日本インカレで優勝、それも日本学生陸上選手権大会での記録を大きく上回る8分45秒を切ることを目標だ。

「少し欲張りかもしれませんが、泣いても笑っても卒業まであと2年。大舞台に立つことができる機会も限られていますからね。今はいままで以上に順位とレース内容に高い目標を設定して、自分を奮い立たせたいと思っています」

8分40秒台、それは学生陸上だけではなく実業団でも十分通用するタイムだ。卒業後も陸上選手として活躍することを考えれば、必ず到達しなくてはいけないラインでもある。「目標としているのは、龍谷大学陸上部の先輩、高岡寿成(アトランタ、シドニー五輪長距離代表)さん。国際大会での実績はもちろんです。競技への向き合い方や人格など全てを尊敬しています。その高岡さんを育てた西出監督に指導していただいていることは、とても自信につながっているんです。長距離の練習はつらいですが、監督から『これは学生時代の高岡と同じメニューやぞ』と言われるのがんばらないわけにはいかないですよ。僕にとってはこれ以上自信がつく練習はありませんよ」



第11回 WATA オープンテコンドー大会での栗山さん

強豪選手との決勝戦

決勝戦の対戦相手となったのは、本場韓国でも注目されるオーストラリア人選手だった。その実力はもとより、国際大会での豊富な実績から広くその名を知られる有名選手だ。

「対戦を知った時は少し焦りました。それまでの試合を見て『こりゃあ別次元だな』と思っていましたからね。以前から目標としていたトップ選手と実際に対戦するなんて現実味がありませんし、勝てる見込みも少ない。でも、不思議と緊張はしなかったんですよ」

決勝戦は2分間の2ラウンド制。栗山さんは序盤から積極的に攻め、キャリアで上回る相手に終始落ち着いた試合運びで勝利を手にした。試合中は「絶対に負けるか」とずっと心のなかで唱えながら相手に向き合っていたという。まさに気迫がもたらした勝利だった。



「技術では間違いなく相手が上。ならばせめて、気持ちだけでも負けずに立ち向かっていこうと思っていました。それに、これまで積み重ねてきた練習量には絶対の自信がありましたから」

テコンドーを選んだ理由は、チームスポーツが嫌だったから」

子どもの頃からスポーツが大好きで、中学高校とバスケットボールに打ち込んできた栗山さん。そんな彼が、大学入学を機にまったく未経験だったテコンドーを始めたのには大きな理由があった。

「ひとこと言えば個人競技への憧れですね。バスケットボールはとも好きでしたが、のめり込むほどに自分の努力だけではどうにもならない、チームスポーツに嫌気がさすようになりまし。チームメイトがいつも自分と同じように練習に励むわけじゃないし、試合ではチーム全員が諦めない気持ちを持っていないければ、勝つことはできない。本当はそれも含めてチームスポーツの醍醐味なのでしようが、一度決めたらトコトンやらないと気が済まない自分には、どうしても納得できなかつたんです」

個人競技、それも格闘技なら自分のがんばりがそのまま結果につながり、やりがいを感じる事ができるだろうと考えた栗山さんは、入学してすぐにテコンドーサークル RATS に入会。「大学ではスポーツだけじゃなく、勉強やアルバイト、遊びにもしっかりと時間を使いたい」と考えていた栗山さんに

とつて、RATS が部ではなくサークルだったことも決め手だった。

RATS の練習は週2回。サークルの活動では大学の体育館を使うことができる機会が限られているため、練習場所は学外の公共施設などを利用することがほとんどだ。

「場所の確保から練習メニューの設定まで全て自分達で手配しなくてはなりませんから大変です。しかし、短い練習時間でメリハリをつけて集中できるこのスタイルが私には合っているんです」

体力づくりのためにおこなっている自主練習では、大学からほど近い伏見桃山陵で参道の階段をひたすら走り込んだ。「幼い頃からテコンドーの練習に励んできた強豪選手達に、いきなり技術で追いつくことはできない。まずは体力、技術はきつとついてくる」と、講義の合間やアルバイト前の時間を見つけては、ほぼ毎日続けてきた。200段を超える階段を5往復、10往復とするうちに「俺、なんでこんなことやつてんのやろうか」と、やめたくなるのは毎回のことだった。最後の力を振り絞って走り終えた後には、喉の奥からかすかに血の味がした。

すぐには成果の出ない体力トレーニングの原動力となったのは、「昨日よりも成長したい」という栗山さんの強い思いだ。

「負けず嫌いなんですよ。RATS のメンバーが自分よりも激しいトレーニングをしていると知ったら、『それより上を行くぞ』と意気込んでしまう。一緒に練習できる時間が少ない分、日頃のがんばりがお互い良い刺激になっているんじゃないですか」

RATS のチームプレーがもたらした快挙。サークルだからといって勝負でも練習量でも負けたくはない。

テコンドーサークル RATS
くりやま こうだい
栗山 廣大さん

文学部4年生 京都市立日吉ヶ丘高等学校出身

写真左より、杉本 拓人さん（経済学部3年生兵庫県立八鹿高等学校出身）、西尾 尚倫さん（経営学部4年生大阪府立堺東高等学校出身）、栗山さん、北尾 彰悟さん（経営学部4年生島根県立松江商業高等学校出身）、瀧川 潤一朗さん（経済学部4年生愛知県立新城東高等学校出身）

4月28日、大阪府堺市にて開催された第11回 WATA オープンテコンドー選手権大会 68kg級で、見事優勝を果たしたテコンドーサークル RATS の栗山廣大選手。

創立7年目を迎えた RATS の快挙だったことはもちろん、並み居る強豪がひしめく国際大会において、大学のサークルに所属する選手が優勝するのは異例のことだ。

オリンピック競技でもあるテコンドーは国内においても選手層が厚く、トップ選手のほとんどが大学の部や道場に所属して練習漬けの毎日を送っている。入学時には初心者だった栗山選手が、限られた条件のなかでここまで成長した理由には、文字どおり血の滲むような努力と周囲の仲間達の支えがあった。

自分達で考え、自分達で実践する。

現在、RATS には、4年生を含めた約20名のメンバーが在籍している。そのほとんどが栗山さん同様、大学入学までテコンドー経験がない初心者だった。

常任の指導者がいない RATS の練習方法は、「自分達で考え、自分達で実践する」。試行錯誤を重ねながら互いに教え合い、切磋琢磨することでともに成長してきた。

以前は、龍大OBで多くの大会で実績を残した、元国内トップ選手の李裕鎮（イ・ユジン）さんが頻りに指導に訪れていたが、李さんの現役引退と海外移住をきっかけに、練習は全てメンバーの手でつくり出すことになった。

「現在は李先生に教えてもらったことを中心に、インターネットで有名選手の試合動画を研究したりと自分達なりに工夫を加えています」（メンバーの瀧川さん）

WATA オープンテコンドー選手権大会決勝戦、優勝を決めた栗山さんを囲んだのは、その勝利に歓喜し涙する RATS の仲間達だった。「チームスポーツが嫌になつてテコンドーを始めて、ずっと一人でがんばつてきたつもりでしたが、『そうじゃなかったんだな』と実感しました。優勝を自分以上に喜んでくれる仲間なんて、そうそういないですよ」

練習も学業も切磋琢磨。栗山さんの活躍の背景には、個人競技だからこそその苦しみを分かち合えた、RATS のチームプレーがあった。



元バレーボール・プレミアリーグ選手。現在、経済学部1年生。

女子バレーボール部
ほりさき ちえみ
堀崎 智恵美さん
経済学部1年生
日本航空高等学校出身
(トヨタ車体クインシース)

今春、女子バレーボール部に大型新人が入部した。昨年までバレーボール・プレミアリーグのトヨタ車体クインシースで、主力選手として活躍していた堀崎智恵美選手だ。「技術だけでなく、生き方をも伝える指導者になりたい」と、6年間プレーしたチームを退団し、教員免許取得をめざして経済学部に入部した。苛烈な勝負の世界から一転、学業と部活の両立に励む学生となった堀崎選手に、転身の経緯や現在の思いを聞いた。

「迷ったら厳しい方を選ぶ」

関係者の誰もが驚く転身だった。高校を卒業後、実業団に入団して6年目。所属していたトヨタ車体クインシースでは副キャプテンを任せられ、選手としてはまさに円熟期を迎えていたなかでの退団。

「それも、大学生になるなんてね。反対されることはありませんでしたが『まだ現役でプレーできるのどうして?』と、聞かれることは多かったですね」

退団のきっかけは、トヨタ車体クインシースを率いていた葛和伸元監督の退任だった。葛和氏は、かつて全日本女子バレーボールチームの監督も務めた名将。熱血漢で知られ、勝ち負け以上に試合への向き合い方を語るその人柄は、選手達の信頼も厚かった。そして堀崎選手もまた、葛和監督に憧れてトヨタ車体クインシースに入団した一人だった。

「葛和監督にはバレーボールの技術や戦略面だけでなく『プレーを通じていかに人間的に成長できるかが大切』ということを教

えていただき、とても影響を受けました。それだけに監督の退団を知ったときには大きな喪失感があり、それまでは考える余裕もなかった、自分の将来について思いを巡らせるようになりました。そして、現役時代の何倍も長い引退後の生き方を思い、『プロ選手としては、ここで区切りをつけてみようか』と決めたんです」

そのままチームに残れば、新たなシーズンも中心選手として戦力を期待されるだろう。しかし、堀崎さんはいずれ訪れる「元プロ選手」となった自分のあり方を見据え、早くからその準備にかかろうと考えたのだ。一般企業への就職も検討したが、やはりこれまで打ち込んできたバレーボールに関わる道へ進みたかった。めざすは指導者。それも、尊敬する葛和監督のように、バレーボールを通じて人間の成長を伝えられる指導者になりたい。堀崎さんは退団を決意し、教員免許取得のため大学進学に向けて踏み出した。

「小学校高学年でバレーボールを始めて以来、ずっと練習漬けの生活でしたから、私にとってはプロ選手を続けるよりも学生生活の方が険しい道かも。でも『迷ったら厳しい方を選び』が私の信条ですから。これも葛和監督の受け売りですが(笑)」

ゆるま湯よりも、ぬるま湯よりも、100%以上の力が求められる場所へ

堀崎さんは、いくつかの大学を候補に進学先の検討を始めた。高校生の頃から寮生活をしていたから土地にこだわりはない。た

だ、より良い学びの環境と、ともにバレーボールを楽しむことができる仲間が欲しかった。

葛和監督と女子バレーボール部の川島監督に親交があったことから、龍谷大学の見学に訪れた堀崎さんは、そこで女子バレーボール部の選手達が懸命に練習する姿に心打たれた。「この選手達と一緒に頑張って日本一をめざしてみたい。そう思っただけで龍谷大学の受験を決めました」

進学先を検討していた堀崎さんのもとには、全日本大学選手権の常連校をはじめとする他大学からの誘いもあった。「すでに全国レベルのチームに入るよりも、これからトップを狙う女子バレーボール部に魅力を感じました。万全の状態であるま湯に浸かるよりも、100%以上の力が要求される場所の方が私自身、より成長できると思っただけです」

なかには授業料免除を提示した大学もあったが、堀崎さんは「全額自分で払うと決めています」とあっさり断った。

2月からは大学近くで一人暮らしを始め、生活費のためにアルバイトも決めた。

「春からは講義、練習、アルバイトと一日が過ぎていく学生生活が本格化して『やっとな大学生らしくなってきたなあ』という感じで。予習・復習にトレーニング、生活費だって稼がなくちゃいけないし大忙しですよ。バレーボールだけしていれば良かった実業団時代とは180度違う生活で、最初は切り替えが大変でした」と笑顔で話す堀崎さん。「でもね、慣れると楽しい毎日。最近では『人権論』の講義がおもしろくて」

仲間を支えることで成長したい

入学直後におこなわれた関西大学バレーボール連盟春季リーグ戦、女子バレーボール部は10戦全勝で見事7連覇を勝ち取った。その圧倒的な存在感で最優秀選手賞を受賞した堀崎さんは、「私なんかでいいのかな。なんだか申し訳なくて」と笑う。経歴を考えれば当然のことだが、チーム内での堀崎さんの役割はただのプレーヤーではない。コーチと選手のちょうど中間に位置し、技術面だけではなくチームの精神的支柱として若い仲間達を支えている。試合中の駆け引きやコンディション調整に関するアドバイスなどは、豊富な経験を持つ彼女ならではの。豊富な経験を持つ彼女ならではの。

「私の存在がチームの安心感につながればうれしいですね。ミスをしなくても必ず仲間がカバーしてくれるのが、バレーボールの素晴らしいところ。普通の1年生じゃない、特別な経歴の私を優しく受け入れてくれたチームメイトや監督に、少しでも恩返しがしたいという気持ちもあります」と話す堀崎さんの表情は、気を張り詰めていた実業団時代とは比べものにならないほど柔らかい。

「今は仲間を支えることで自分が成長したい。『バレーボール選手である前に、一人の人間としてどのように生きるか』。これは今の私にとってとても大きな課題だし、これから指導者になったときに一番伝えたいことでもあります。これからの4年間で私らしいチーム貢献をして、最高の結果を手に入れたいと思っています。目標ですか?当然、全日本大学選手権優勝ですよ」

和歌山と龍大の関係に新たな一歩。 龍谷ソーラーパークいよいよ始動！



に さか よしのぶ
和歌山県知事 **仁坂 吉伸** 氏
和歌山県和歌山市出身。
東京大学経済学部卒業後、通商産業省(現経産省)に入省。
経済産業省、ブルネイ国大使を経て平成18年より現職。現在2期目。

歴史的にも関りの深い龍谷と和歌山

赤松 そもそも本学にとって和歌山は、西本願寺とのつながりも深く、「ご縁のある地」であります。鷲森別院や日高別院があつて門徒が多いですから。また、和歌山出身の僧侶は、時代の大きなうねりのなかで、改革の旗手となられる方が多くいらっしゃいました。それが和歌山の気風なのでしょうね。歴史のなかでもきちんと、活動内容やお名前が残つていらっしゃるんですよ。そんなことから私も私どもにとつても、身近な場所なんです。

仁坂 そうなんです。今回のソーラーパークの件を機に、改めて龍谷大学について知りましたが、私が思うに貴学には二つのいいところがあります。一つは伝統があるということ。そしてもう一つは宗教、親鸞聖人の教えが軸となつているということです。伝統というのは試行錯誤の連続、悩みの連続の蓄積でもあり、そのなかで現在に続いているのは、それなりの理由があるんですね。一人の天才が築きあげたものではなく、ずっと引き継がれてきたものを、学問的にも教育的にも使いながら、また蓄積していく。それが素晴らしいです。また宗教は、やはり人間の心の心棒をつくる時に、とても大事な役割をするものです。大学の目的は真理を教えるとともに良い人間をつくることだと思いますから、その時に宗教があるのはとても良いことだと思います。我々は大学教育ではなく、初等・

中等教育を担っていますが、一番大事なことは子どもに人の道を説き、良い人間をつくるということ。それができる和歌山でありたいと思つています。そんな意味で、龍谷大学の建学の理念、「伝統には共感するところが大きいですね。」

赤松 本学は地域再生の核となる大学づくりを推進しておりまして、地域への大学の教育学資源の提供、あるいは学生が地域に出かけていつて地域を活性化させるということを積極的におこなつています。和歌山でもいろいろな活動をさせていたいただいておりまして、その一つが通称「みらいプロジェクト」と呼ばれている「みらいの環境を支える龍谷プロジェクト」です。これは法学部生の有志が机上で勉強しているだけでは本当の法律は見えてこないという考えのもと、実際に様々な地域を訪れて景観調査や、まちづくりの提案をするというものです。2010年度に龍谷大学校友会の和歌山・海南有田支部が結成されたこともあり、和歌山では二度、まちづくりの現状やその可能性について調査し、地元住民や専門家の方々、地元高校生らとの交流をおこないました。また、2011年9月に発生した台風被害の際には、復興ボランティアにも参加しています。

Uターン就職や移住も歓迎！

仁坂 最近、Uターン希望者の人達を集めて和歌山に住んでみませんか、という試みをしていまして、ライフスタイルを変えたいとい

この10月、いよいよ「龍谷ソーラーパーク」での発電が開始される。この取り組みは、龍谷大学、和歌山県印南町、株式会社京セラソーラーコーポレーション、株式会社PLUS SOCIAL 及びトランスバリュー信託株式会社と連携して設置するメガソーラー発電所で、利益を地域の活性化などに還元する「地域貢献型メガソーラー」としては国内初の試みだ。パネルの設置場所は、深草キャンパス及び和歌山県印南町の町有地など3か所。本学は今までも様々な取り組みを和歌山県においておこなってきたが、このソーラーパーク開設を機に、今後ますます深い関係を築いていくことになる。そのスタートを記念して赤松学長が和歌山県庁を訪問、仁坂吉伸知事と対談した。

利益は和歌山や京都の地域貢献活動の資金に

赤松 東日本大震災後の日本のエネルギー供給の可能性を、大学としていかに探るか龍谷ソーラーパークのアイデアはそんな思いのなかで出てきたものです。自然エネルギーに大学として資金を提供し、地域にその利益を還元するというこの取り組みを、大学の一つの社会貢献として展開することで、社会のいろんな可能性というものを学生に提示していきたいですね。うまく稼働して和歌山県にも貢献できたらいいなと思つています。

仁坂 和歌山県は自然エネルギーでは、とても条件に恵まれた地域です。日照時間は全国上位に位置しますし、風力発電は近畿う若い人が移住してきています。和歌山では独自の取り組みとして、移住者と地元の間が協議会をつくり、新たに移住を考える人に対して、リアルな田舎暮らしの実態を話したり、生活のアドバイスをするんですよ。そんな試みが功を奏して、定着率はものすごく上がつているんですよ。また「企業のおごと」という取り組みでは「食」や「農業」に対する関心が高い企業に、県内の農村地域の方々や米づくりの体験などを通して交流するプログラムを、提供しています。和歌山はそんなことを盛んにやっていますので、龍谷大学の学生もまた、ぜひ来ていただければと思います。

赤松 龍大も就職ではUターン、Uターンする学生が増えています。本学には毎年和歌山からは70名ほど入学していきまして、3割ほどがUターン就職しています。最近Uターン率が上がつている背景には、地元企業に大学に来て就職説明会をしていただいているので、学生にとって地元に戻るといふ選択肢が現実的になるんじゃないでしょうか。今後は和歌山の企業にもたくさんご参加いただけたらと思います。

仁坂 和歌山県は県外大学進学率が77%と非常に高いのです。やっぱり就職活動は進学先でおこなう学生がほとんどですから、和歌山の中小企業はそこまでリーチできないんですよ。そこで県としてもUターンを応援したいと、地元企業の就職情報の提供を支援はじめています。京都でも和歌山の企

の6割を担っています。また、県内は森林が豊かで県全域の面積あたりの森林割合は77%を占めています。このため、全国有数の森林資源があり、豊富なバイオマスエネルギーを利用することができるところです。また、周囲が海です。メタンハイドレートがたくさん眠っている可能性もある。これは現在和歌山県独自で探査中です。それから、期待しているのが海洋エネルギーです。黒潮の海流など海洋エネルギーを利用した発電の可能性について検討を進めていて、いろいろと夢は膨らんでいます。自然エネルギーはどんなものでも歓迎です。と我々も一生懸命プロモートしているところなんです。ソーラーに関する話もいろいろと出ていきましたが、やはり商業的なものが多い。そんななかで、龍谷大学のアイデアは社会的貢献の意味合いが強く、素晴らしいと思われました。

赤松 利益は和歌山や京都の地域貢献活動や、市民活動の支援資金として提供させていただくことにしています。関連会社の皆さんと一緒に知恵を出し合つて、事業を成功させていきたいですね。開設の記者会見では、非常に多くのメディアに関心を持っていただき、注目を集めていると感じました。

仁坂 そうでしょうね。固定価格買取制度ができたことが追い風となつて、商業的にどうしたら採算を合わせられるか、ということばかり世の中の注意が向いているなか、社会貢献の意味合いが付け加えられたところが画期的です。

業を集めた就職イベントなどを開けるといいですね。

農学部の実験果樹園にぜひ！

赤松 2015年、滋賀県の瀬田キャンパスに農学部をつくるんですよ。大学として農学部開設は35年ぶり、仏教系の大学では全国初で、全国の私学でも7校目なんです。名前は「農学部」とオーソドックスに構えながら、農学に挑戦する知性と身体性をそなえた学生を育成したり、農の楽しさやお洒落さも取り入れていきたいと考えています。

仁坂 それは和歌山に誘致すれば良かったです(笑)。滋賀県と和歌山県は農業組成が180度違うんですよ。和歌山は果樹が60%、次に野菜が16%、米が8%。滋賀は米や畜産が中心で果樹はほとんど生産されていないですよ。ですから、果樹や野菜の実習が必要でしたら、ぜひ和歌山を使つてください。
赤松 果樹は陽がよく当たる傾斜地でない、良いものがつくれませんものね。では、それも含めまして(笑)、今後ともどうぞよろしく願っています。

『蜀江紋金襴』
しよっこうもんきんらん

5月14日、龍谷大学アバンティ響都ホールにおいて、龍村美術織物から寄贈された緞帳のお披露目式がおこなわれ、来場者はその絢爛さに目を奪われた。緞帳に織り出された文様の名は「蜀江紋」。このホールの緞帳は「蜀江紋」を大きくデフォルメし、華やかかつ大胆に再現されたものである。この「蜀江紋」は、龍谷大学にとってかけがえない縁を今に伝えている。

蜀江紋とは、八稜形を中心とした幾何学文様の周囲に七宝や宝冠などの吉祥文をあしらった文様を指す。その名のとおり、中国三国時代の蜀（現在の四川省）周辺で生産されていた織物。製織技術が高まる宋代以降には装飾性が高い金襴で織られるようになり、貴人だけが所有することができる高級織物として知られるようになった。日本には鎌倉時代に入宋した僧達が袈裟として持ち帰ったことでその製法や文様が伝えられ、おもに茶道具を入れる仕覆などに用いられて、長い歴史のなかで名物裂として珍重されてきた。

「蜀江紋」と龍谷大学との縁は、明治12年（1879）に完成した大宮学舎にはじまる。

洋風建築が国内にはまだ数えるほどしかなかった当時、ほかに類を見ない先進的な建築技術を駆使して建てられた大宮学舎の壮麗さは日本中の注目を集め、その落成後には明治天皇行幸の栄誉に浴することとなった。明治天皇は、龍谷大学の「進取の精神」の粋ともいえるこの建築を大層気に入られ、見学予定時間を大幅に過ぎて大宮学舎にとどまられたという。そして後日、行幸に際しての関係者の苦勞をねぎらって、明治天皇ご夫妻から蜀江紋金襴が下賜された。この格調高い文様の織物はただちに大宮学舎本館講堂の天井にあしらわれ、その後100年以上もの間、大宮学舎のシンボルとして講堂を彩り続けてきた。

平成4年（1992年）から5年間をかけておこなわれた改修工事の際には、蜀江紋金襴も忠実に復元された。復元作業には、正倉院宝物や祇園祭懸装品などの古代裂復元で知られる、龍村美術織物が技術を結集して担当し、往時の素材や色、製法までをも忠実に復元することに成功した。龍村美術織物の顧問を務める白井進さんは「明治期に下賜された蜀江紋金襴が製織された経緯など不明であったが、当時の歴史的背景をかえり見て染料や製織技法などを解明しながらの復元作業は容易ではありませんでした」と話す。古代織物の研究・復元に実績を多く持つ龍村美術織物は、シルクロードを調査した大谷探検隊が将来した染織品も復元している。

現在、蜀江紋は龍谷大学アバンティ響都ホールだけでなく、その金襴は大宮学舎本館講堂を彩り、また龍谷大学オリジナルグッズとして名刺入れやテーブルセンターなどの文様にも使われて、教職員や学生、OBに広く親しまれている。古くから、名物裂には好んだ茶人の名称や文様の名称、伝承された場所の名称などが付けられてきた。織り成された文様がどのような意味を持ち、誰によって受け継がれてきたのかを裂の履歴として重視してきたのだ。

龍谷大学アバンティ響都ホールに掛かる緞帳に織り出された吉祥文様には、明治天皇ご夫妻のお気持ちと龍谷大学の歴史が込められている。後世では、この文様を「龍谷蜀江紋」と呼んでいるかもしれない。

明治天皇ご夫妻のお気持ち
が織り成された
格調高い吉祥文様



龍村美術織物から寄贈された「蜀江紋」の緞帳。龍谷大学アバンティ響都ホール

司馬さんを心の師に

写真家

井上

博道

太田 信隆



満開の秋桜を撮影する井上氏 奈良県葛城市にて (提供 BAN INOUE)

ようにほそくするどく裏側につきとおる。その瞬間を、この学生は大屋根から撮るべく幾日もかよっていたという。

知り合ったときは、学生はいくつものコンテスタに入選していて、その道では知られていた。

『司馬達太郎が考えたこと』(エッセイ9)〔新潮文庫〕には、次のように書かれてある。

「写真機は当時もつとも値段の安かつたりコーフレックスという弁当箱のような機械でそれも使い込んでいたためにがたがたしておりがたを輪ゴムでとめていた。この写真機でかれは何度もコンテスタに入選していた」

私は、龍大で井上博道さんと机を並べ、一九五四(昭和二十九)年に一緒に卒業した。井上さんが、宮城泰年さん(現・修験宗本山山聖護院門跡)に誘われて部活の写真部にいったことなどは、『校友会報』の前身に追悼文として寄稿した。

さて、この度である。本誌『龍谷』の編集担当者から、「龍谷人偉人伝」に井上博道さんを取り上げることになりました。つきましては、・・・というところで、執筆を依頼された。ちよつと、待てよ、と思った。「偉人」とは、偉大な人、大人物のことである。「俺、君」と呼び合った同級生を、「偉人扱い」することにためらいがあった。

しばらくして、「棺を蓋いで事定まる」という中国の古典にある言葉を思い起こした。人は生きている間は、利害や感情の違いが入りこんで、公平な判断がくだせないが、棺の蓋をした後に本当の評価が定まるという。

「青木が編集のしごとをしている窓から、銅ぶきの龍大図書館の緑青の大屋根がみえる。香住の田舎からきた学生は、ある時期、毎日のように弘暁前にその大屋根に登っていたらしい。この学生は、その大屋根から国宝唐門の内側を見おろすのである。

唐門は、透かし彫りの彫刻でできあがっているために、昇りそめた陽光が唐門の表に当たるとき、透かし彫りのすきまから光が針の

井上さんは写真家として、卓越した多くの作品を遺した。天分を発揮し努力し、彼ならではの境地を切り開いた。「龍谷人偉人伝」に加えて然るべき人だと思った。

『龍馬がゆく』『坂の上の雲』など、今も読み継がれている作家の司馬達太郎さんと親交があった、というより、共に歩んだ人といった方がよい。司馬さんが書いたものに井上さんはしばしば登場する。彼の面影を彷彿させるその文を、今一度読み返してみたい。執筆を引き受けた。

(一)

井上博道さんは、日本海に面した兵庫県の香住町(現・香美町)の禪寺の長男として生まれた。厳父は龍大で、奈良・東大寺の第二百六世の別当(管長)であった上司海雲さんと同期で、その縁で博道さんは、学生の頃からしよつちゅう東大寺を訪れていた。

上司さんは、塔頭(山内にある寺院)の観



1978年に開催された個展『室生の仏たち』で談笑する司馬氏と井上氏 今橋画廊にて (提供 BAN INOUE)

音院で起居していた。龍大では英文学を専攻し、インドの詩人タゴールを卒業論文に書いている。文学・芸術を愛する坊さんで、観音院には、杉本健吉(画家)、会津八一(早大教授・歌人)、入江泰吉(写真家)、須田剋太(画家)ら錚々たる人が出入りし、文化人のサロンになっていた。司馬さんの『十六の話』には、次のように書かれている。

「井上博道氏は、そういう人たちにとって息子のような若さだったから、その集いの周辺で遠慮していた。しかし上司氏は、この若者の才能を美術品のように愛し、その感受性を肥やすことに、ずいぶんつとめられたらしい」

井上さんは、龍大で仏教史学を専攻した。卒業の翌年、産経新聞の入社試験を受けて写真部に採用された。文化部の次長になっていた司馬さんに報告し、身元保証人になってもらった。

入社してから三年目の頃、司馬さんが井上さんを社内の喫茶室に誘った。社会部の取材で酷使されているのを見て可哀そうに思ったようである。

「井上君、文化部で写真の連載やらへんか。タイトルは『美の脇役』や。例えば四天王の足の下に踏みつけられとる邪鬼や。なつ、感じ判るやろ」

それから、司馬さんの美学論となり、井上さんが学生時代に写した京都や奈良の寺々の話になった。取材には度々、司馬さんが同行した。荷物が増える時は、司馬さんに三脚を担いでもらった。『美の脇役』は、週一回

三年間、連載された。好評で、後にまとめた単行本になった。

井上さんは、産経新聞に十年ほどつとめ昭和四十二年にフリーカメラマンになった。東京に出て一旗あげたいと思い、司馬さんに相談したら「君が奈良・京都を離れ、上京して何ができるか」と論じられた。これには二の句が継げなかった。

それから、井上さんは畿内の寺院や神社、旧跡を中心に、自然や文物を撮り続け、作品集として次々と世に問うた。

なかでも、『邪鬼の性』『羅漢』『不動の怒』と題した写真集が注目された。彼独特の感性を生かして、祖先が深く敬い続けてきた存在を追い求めたもので、初めての本『美の脇役』の延長線上の力作ともいえる。

著作は四十冊をこえる。古寺、仏像、山河、花園風景…。彼の作品を愛するファンが全国に広がった。平成三年には、校友会から龍谷賞が贈られた。

彼の代表作は、天平の昔、仏教文化の華が咲いた大仏―毘盧遮那仏が坐す大寺の、こころと風光を撮影した大著『東大寺』(中央公論社刊)である。取材に五年の月日かけた。サイズはA3、横長、布表装である。ずつしりと重い。

本を開くと、先ずは、大仏殿の夜景。ページを繰ると二月堂の修二会―お水取りの場面が何枚も出てくる。この古儀を参観した人なら、籠りの僧の杵の音が、聞こえてきそうな気がするだろう。

司馬さんは、『十六の話』のなかの「華厳をめぐる話」を、こつ縮めくつしている。



(提供 BAN INOUE)

「不覚にも、私は、このひとなががい歳月をかけて東大寺のくらしを撮りつづけていることに気がつかなかった。

今後、私は、もし外国人から、もつとも純粋な日本とはなにかときかれた場合、きつとこの写真集をひろげてみせるにちがいない」

去年の十月五日、井上さんは京都府木津川市のJR大和路線のトンネル内で倒れていた。トンネルの出口から見える秋の田圃の風景を撮影していて、事故に遭つたらしい。意識不明の日がつづき、十二月十二日、この世を去った。八十一歳であった。

お別れの会が、今年の一月初八日、東大寺のすぐ近くの泉新公会堂で開かれた。六百人が参列して生前を偲んだ。聖護院の宮城泰年門跡が、井上さんが好きだった京都名物の菓子「生八ツ橋」を遺影の前に供えた。

井上さんは、司馬さんにお裾分けしたかも

太田 信隆 (おおたしんりゅう)
龍谷大学客員教授、元NHK記者、元校友会長

社会との連携

社会に開かれた大学として、大学の知的資源を広く社会に還元。

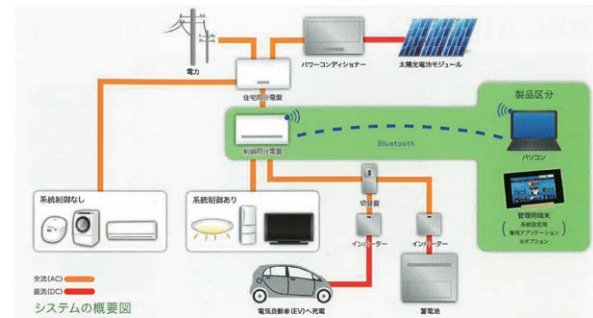
大学の主要な活動・役割の一つであるエクステンション（普及）活動を中心的に担う拠点として開設された龍谷エクステンションセンター（略称：REC）。「社会に開かれた大学」として多彩な社会連携事業を展開している。

Ryukoku Extension Center

三者一体の研究体制で、家庭電力のあり方を変える

2009年からレンタルラボに入居しているトランスポート株式会社が開発する家庭向け制御用分電盤システム「REARTH」（リアス）が、東日本震災後に大きく変化した電力発電に対する意識にも後押しされ、新たな市場を切り拓いている。

この製品は電力会社からの供給状態を常時監視し、停電の際には自動で蓄電池からの電力供給に切り替えるというもの。学生ベンチャーとして創業した同社が電力会社からの受託開発で培った技術を活用して、これまで市場が確立されていなかった家庭用蓄電池分野に自社製品で参入した。トランスポート株式会社代表取締役の田中允也さんは「既に販売されている家庭用蓄電池の多くは、充放電システムに汎用品が使われています。汎用品を使うことにより、20～30%のエネルギーロスが発生してしまいます。エネルギーロスを抑えるため、蓄電池に特化した充放電システムの開発が不可欠です」と話す。



RECでは、企業での豊富な製品開発経験を持つ、理工学部電子情報学科の石崎俊雄教授が研究開発をサポート。そこにRECの担当コーディネーターを加えた「三者一体」の研究体制で、同社の新分野への挑戦を支援してきた。

石崎教授は「次々と新しいプロジェクトに取り組むベンチャー企業の挑戦的な姿勢は、大企業にない魅力です。研究・教育成果を社会に還元することは、大学の大きな使命の一つ。このレンタルラボから、1社でも多くの世界的企業を輩出していきたいですね」と語る。

龍谷大学はRECを中心とした社会連携施策を推進するため、1月に株式会社日本金融政策公庫との間で「産学連携の協力推進に関する覚書」を締結。京滋地区における企業との技術開発や経営相談などについて、これまで以上に連携を強める予定だ。

特色ある中小・ベンチャー企業を支援し、ともに研究開発を進めるREC。理工学・福祉・経営・法律などの実績ある分野に加え今後は、現在、学部開設準備中の農学分野の産官学連携も推進していく。龍谷大学の産官学連携事業が世界を大きく変える日はそう遠くない。



トランスポート株式会社田中允也さんと石崎俊雄教授

【福祉フォーラム2013のご案内】

「家族の責任・家族のこれから」

家族はどこまでみるのか ～家族介護・扶養の限界と展望～(予定)

哲学、倫理学の立場から、人がささあう様々な局面に貴重な業績を積まれてきた驚田清一氏と当事者であるご家族の方々をお迎えして基調講演とシンポジウムをおこないます。

基調講演：驚田 清一氏（大谷大学教授・前大阪大学総長・名誉教授）

日時：2013年11月30日（土）13:30～16:00（予定）

場所：龍谷大学アバンティ響都ホール（京都駅八条口すぐ）

参加費：無料

お問い合わせ：福祉フォーラム事務局（REC 滋賀）TEL.077-543-7744

【龍谷大学経営者ビジネスミーティング2013のご案内】

「経営と人材育成ー日本ハムファイターズを例にー(仮)」

卒業生経営者のネットワーク構築、ニーズ把握、産学連携に加えて、起業に関心のある学生も参加し、起業精神の育成と人脈づくりを促します。

基調講演：津田 敏一氏（株式会社北海道日本ハムファイターズ代表取締役社長）

日時：2013年11月7日（木）

場所：大阪新阪急ホテル（阪急「梅田」駅に隣接）

対象：龍谷大学卒業の経営者

参加費：5,000円

お問い合わせ：REC 滋賀 TEL.077-543-7805

【2013年度後期 REC コミュニティカレッジ申込受付中】

仏教や文化・歴史をテーマに全201講座を開講。

詳細はパンフレットまたはホームページをご覧ください。

（パンフレット請求・お問い合わせ）

HP：https://rec-ryukoku.jp/

TEL.REC 滋賀 TEL.077-543-7848 / REC 京都 TEL.075-645-7892

人間・科学・宗教総合研究センターの各研究プロジェクトの研究活動のほか、研究関連の動きをご紹介します

Ryukoku Academic

龍谷大学大学院経営学研究科付置機関

京都産業学センター

<http://www.biz.ryukoku.ac.jp/graduate/kic/>

今年で開設12年目を迎える京都産業学センターは、京都企業が長年培ってきた経営手法を京都の地域特性とのかかわりを中心に学術的に共同研究し、その研究成果を広く社会へ発信することを設立の目的の一つとしている。

京都1200年の歴史の中で育み洗練された高度な伝統工芸の匠の技、伝統産業の技術を土台にして世界市場に通用する技術開発を成し遂げた京都のものづくり産業・京都企業については、「京都モデル」として注目されている。京都産業学センターは設立以来、一貫して京都企業・産業の歴史や特徴を学問的に整理し、産業界および自治体関係者との共同研究会や各種研究会、経営学特別講義の毎年開講などにより、その成果を蓄積・発信してきた。すでに11号を数える京都産業学センター年報『京都産業学研究』は、産業界と自治体などとの架け橋として多くの方に読まれている。また、著名な京都企業経営者の連続講義である、経営学特別講義「我が社の経営にとって京都とは」などの講義録も10巻を数えている。さらに、35回を超える京都産業学研究会、20回を超える京都工芸サロンの開催などを通じて、地域産業関係者との交流を深め成果を蓄積してきた。

経営学研究科における京都市職員の方々による講義「京都の産業と産業政策」や、学部・経営学特殊講義「我が社の経営にとって京都とは」は、特色ある貴重な講義である。受講者からは、「京都企業経営者の皆さまの講義を聴いて、これまで経営学を学んできたことと実際の企業のことが結びついた」「京都企業に就職したい」「京都マインドをもった経営者になりたい」といった感想が寄せられるなど、学部生・大学院生にとってインパクトの大きい講義となっている。この講義録は、京都の産業・企業のこれからを考える基本文献として貴重なものとなっている。

京都には多数の大学が所在しているが、「京都モデル」とも呼ばれる京都企業・京都産業について、組織的な地域連携を志向した研究活動に取り組んでいるのは、龍谷大学京都産業学センターだけである。また、全国の大学をみてもこうした組織的な地域産業の研究はきわめて手薄な状況であるため、全国か



らも京都産業学センターへ大きな期待が寄せられている。昨年開催された、開設10周年記念シンポジウム「地域産業の活性化と地域産業学の課題ー龍谷大学京都産業学センターの10年とこれからー」では、ノーベル賞受賞者を育んだ京都を代表する企業「島津製作所」も取り上げた。このシンポジウムの内容は『京都産業学研究特別号』として刊行されている。さらに、長年の課題であった、企業研究シリーズ（ブックレット版）の第1巻『島津製作所』（晃洋書房）が市販本として本年8月に刊行された。当シリーズ第2巻も、今年度中の刊行準備が進められている。

京都産業学センターの新たな飛躍をめざして

京都は1200年の歴史があり、龍谷大学も374年の歴史があります。京都という地域に支えられて、京都企業も本学も今日を迎えています。昨年、京都産業学センター開設10周年記念事業を終え、そして今後10年のセンターの新たな発展に向かって取り組まなくてはなりません。京都産業学センターに大きな期待が寄せられる中で、より地域に根ざした活動をおこなうために、龍谷大学の全学的な取り組みとして運営することが必要です。また、伝統産業の研究活動の一環として実施している京都工芸サロンについては、近・現代産業に関する活動との連携も図りながら、より一層の活性化を図るべく活動して参ります。引き続き京都の産業界、自治体などの皆様の積極的なご参加ご協力をお願い申し上げます。

京都産業学センター代表 重本 直利

経営学特殊講義「我が社の経営と京都」（「我が社の経営にとって京都とは」から科目名変更）は、すぐれた京都企業の経営者の皆様にご無理をお願いして、経営の真髄を語っていただくとともに、ご講義いただく京都企業にとって「京都」がどのような意味・意義をもっているかお話し頂いています。京都企業に学ぶこと、京都企業から学ぶことは、京都の産業に学び、京都の産業から学ぶことにつながり、世界に貢献できる「京都発の経営学」という希望へとつながります。本講義・講義録だけでなく、龍谷大学・京都産業学センターの活動と成果を、より多くの方にお知らせするために、コンテンツのデジタル化やオンデマンド配信などの可能性に挑戦していきます。

経営学部教授(京都産業学担当) 山西 万三



JR京都駅から少し西に京都本部を構えるPHP研究所。京都近郊に住む人ならば、電車から見えるその社屋を眺めながら、幾度となく思ったことであろう。「“PHP”ってどういう意味なのか、一体何を研究しているのか」と。PHP研究所は、パナソニック株式会社の創始者である松下幸之助が、1946年に設立された。PHPとは「Peace and Happiness through Prosperity」（物心両面の繁栄により、平和と幸福を実現していく）という松下幸之助の理念をあらわしている。PHP研究所はその理念の研究と、それを普及するための書籍・雑誌の出版活動のほか啓発セミナー活動など幅広い事業を展開している会社である。年間の出版点数は800点を超え、出版社別の年間発行点数ランキングでは常時トップ10入り。近年では、大ブームとなった『女性の品格』（坂東 眞理子著）や、年末に映画公開される直木賞受賞作品『利休にたずねよ』（山本兼一著）が記憶に新しい。そんな日本を代表する出版社を社長として牽引しておられるのが、本学卒業生の清水卓智さんである。

松下幸之助さんが社長だなんて知らなかった！

山梨出身の僕が、なぜ龍大を選んだかという、当時の入試では、試験が始まって問題を見てから社会か数学かを選択できたんです。それに不得意だった古典も入試科目になかった。京都との縁といえば、叔母が室町にある呉服屋さんに嫁いで、池坊さんの近くに住んでいたくらいでした。その程度の縁で京都の龍大に来た、というわけです（笑）。

大学へはその叔母の家に間借りをして通いました。私と同様、地方出身で何となく龍大に入ったという友人が集まれば、勉強そっちのけで麻雀をしたりアルバイトをしたり、そんな学生時代でした。

PHP研究所へは特に大きな志がなくて入社したわけではありません。高校時代に鎖骨を折って入院していたときに、友人が月刊誌『PHP』を持ってきてくれた。それが記憶にあり、就職を考え始めた4年生のとき、帰省の列車を京都駅のホームで待っていると、たまたま目の前の社屋に掲げられた「PHP」の文字が目飛び込んできた。「ここにあったのか。じゃあ受けてみようか」と。こんな具合ですから、入社直前まで松下幸之助が社長だとは知りませんでした。

入社試験の面接では映画を作りたいと言いましたが、そんな部署は当然ないので「普及部」配属になりました（笑）。入社当時は、理解不足からくるPHP理念に対する疑問を、取締役にも平気でぶつけていました。でも、PHP研究所の懐の深さは、私のようなヤンチャ者でも面倒を見てくれるところです。確かに松下の思想が色濃い会社ではありますが、それにかんじがらめではない、自由な気風もあるんです。

三六協定破綻のもとに得た貴重な経験

入社したときに松下幸之助に言われたことは、いまでもよく覚えています。「僕は80歳を超えている。君たちとは違って学歴も小学校だけだ。しかしいまから一斉に月刊誌『PHP』を普及したら、君達には負けない」。なぜかと言うと、知識は大学を出た新入社員の私達のほうがあ

仕事は知識でするものではない。知恵でするものだと言うのです。そして、知恵が生まれるのには公式があって、「知識 × 熱意」なんだと。「君たちには知識が10あっても、PHPを世の中に広めたいという熱意は1しかない。しかし、僕の知識は3か5かもしれないが、熱意は10も20もある」。松下幸之助という人は、こんなふうに熱意を大事にする人でした。PHPの社員全員が持っている『社員手帳』にも、「仕事をするのに一番大事なのは熱意である」と記してあります。

しかし、入社当時の私が持っていた熱意は、松下が言う熱意とは違って、上司をギャフンと言わせたい熱意でした（笑）。当時の上司は非常に厳しい人でしょっちゅう叱られていました。説教に熱が入ってくると、灰皿が飛ぶ。それをうっかりキャッチしてしまうと、余計に叱られる（笑）。こんな上司の下にいましたから、普及成績をあげてグウの音も出ないようにしてやるぞ。そういう「熱意」でがむしやりに働いていました。もう三十数年も前のことです。

当時、朝の会議は7時から。その後、夕方まで外回り。帰社してから対策会議。それが終わってDMの宛名書き。終電の帰宅は日常で、土日出勤も半ば当然でした。私は法学部卒で、卒論のテーマは労基法の「三六協定」でした。恩師を訪ね、「先生、三六協定は嘘ばかりじゃないですか」と言いましたら、「清水君、それが世の中つてもんだ」とおっしゃる。「そういうものか」とスッと楽になったことがありました。

仕事柄、1年目から名だたる経営トップの方々にお会いできました。恥もかきましたが、後に役立つよい勉強になりましたね。

金八先生が日本の教育を変えてしまった!?

いま、ゆとり世代の新入社員の扱い方に戸惑う企業が多いようです。弊社で開催している「ゆとり世代の育成ビジョン」というセミナーは非常に多くの企業様から好評をいただいています。私の持論ですが、日本の教育をダメにしたのは「金八先生」ではないかと。というのは、学校の先生は尊敬される対象として、知識面では生徒より圧倒的に優位でないとはいけない。なのにあのドラマでは「君達に分からないことは僕も分からない。一緒に考えよう」と言って、教師が生徒と同じステージに降りてきてしまう。教育で必要なのは、上位者が価値観を一度破壊すること。すると人はまっさらになって新しい価値観を築き直すんですね。そこに成長するチャンスがあるんです。ですから私は「新人にはグウの音も出ないほど仕事を与えろ」という主義です。理不尽と思われようが、がむしやりに仕事をさせる。それが何よりの成長の糧になるんです。新卒入社から5年間の働きを見れば、その社員がどこまで伸びるか分かります。5年間に自分の枠を越えなかった社員は、それ以上伸びません。これは業界を問わず、どの会社にも言えるのではないのでしょうか。

毎年、当社にもたくさんの学生がエントリーシートを提出してくれます。今年は3000人以上、龍大からも数十人がエントリーしてくれました。私も入社試験の面接をしますが、最近、「就社ではなく、就職したい」というように、概念的に物事をとらえる学生が増えたような気がします。成績優秀だからなのか、「私はこんな仕事をする人間じゃない」など

と言う。当社に来る学生の多くは編集出版希望ですが、「自分なら絶対に売れる本が作れる」と胸を張る。本当はなににもできないのに、バーチャルの世界では何でもできるように思い込んでいる。根拠のない自信を持っている学生が少なくありません。

そういう最近の学生との面接で私が何処を見ているかというと、基本的には謙虚さと、会社との相性です。大学でもコミュニケーション能力が大切と指導していると思いますが、面接で5分も会話をすれば分かかってしまいます。要は普段から家庭で家族ときちんと話ができていくかどうかなんです。家族とのコミュニケーションができていない学生は、面接でも自信をもって話します。一朝一夕にはいきません。

いま何を世の中に伝えるべきか。
伝え手が真摯に考えれば、
本はなくなるならない。

株式会社PHP研究所 代表取締役社長

しみず たか とし
清水 卓智 さん

山梨県出身。1980年法学部卒業。
株式会社PHP研究所入社以来、一貫して月刊誌『PHP』の直販普及活動に専念する。2011年より社長に就任。現在、各種雑誌普及のほか、書籍、通信教育、DVDソフト、eラーニング、映像配信、企業研修など幅広い普及展開を統括。



世界中でプレイし、日本人のイメージを変えてきた。
めざすのは、音楽で偏見や先入観を変えられるDJ。

ミュージシャン (KYOTO JAZZ MASSIVE)

おきのしゅうや
沖野 修也さん

京都府宇治市出身。1989年文学部文学科英文学専攻
(1992年文学部英語英米文学科に改組) 卒業。
日本のクラブシーン黎明期より中心人物として世界的に活躍するDJ、
クリエイティブ・ディレクター。
クラブ・ジャズ・ユニット、KYOTO JAZZ MASSIVEを主宰するほか、
数々のミュージシャンをプロデュースする。
渋谷の老舗クラブ (現在はタマリバ) THE ROOMのプロデューサーであり、
世界唯一の選曲評論家でもあるなど、その活動の幅は音楽を軸に多岐にわたる。

クラブカルチャーを愛する人々の間で、カリスマ的存在の沖野修也さん。これまでDJ、アーティストとして世界35カ国140都市に招聘されただけでなく、CNNやBILLBOARDなどでも取り上げられた、世界標準で活躍する日本人音楽家の一人だ。ここ数年は、音楽で空間の価値を変える「サウンド・ブランディング」の第一人者として、映画館、ホテル、銀行、空港、レストランの音楽設計を手掛けたり、世界初の選曲ガイドブック『DJ選曲術』(リットーミュージック)を執筆するなど、その活動は「DJ」という枠を大きく越えて広がっている。DJとしてDJの概念を塗り替え続ける沖野さんが見ている世界とは、

DJは芸術表現だ!

いまだにクラブとかDJってイメージが悪いと思いますよ。人の曲をかけるだけのDJなんてアーティストじゃない、ナンパしに行くハコの音楽係だ、と。でも僕は、DJは作曲や演奏と並ぶ芸術表現だと思っています。例えばスタイリストは自分で服を作るわけではないけれど、いろんなデザイナーの服を組み合わせることで、個性を表現しますよね。DJがおこなう選曲もスタイリストの洋服と同じく、目的に応じて曲をピックアップ、曲順を決定し、1時間なり2時間なりのDJプレイのなかで自分の世界観を表現するものです。「DJをする」と「DJである」というのは全く違います。機材さえあれば誰だってDJはできますから、でも僕からしたらそれはDJじゃない。人の曲を使って自分の独自の組み合わせ、世界観がつくれているかどうかなんです。クリエイティブなDJなら、決まった10曲を渡されても自分にしかできない曲順で観客を驚かし、踊らせることができると思いますよ。いまじゃ誰もが世界中のあらゆる音楽を、簡単に手に入れることができます。だからこそ逆に何を選んでよいかかわからない状況になっている。音楽に限らず、あふれる情報を「選び」、一番インパクトのある形に「組み合わせる」「表現する」。そんな人の需要があらゆる場面で増えていますね。そしてセ

レクトする人の個性や良識が問われ始めていると思います。特に音楽の場合、ヒット・チャートの上位10曲を流しておけば普通に盛り上がるんです。でもそれって誰でもできること。僕ならヒット曲を1曲も使わなくても人を感動させたり、興奮させたりできるし、ヒットチャートに入っていないのにみんなが好きになりそうな曲を提案できる。そっちの方がずっとクリエイティブじゃないですか。

総理大臣よりも、世界では知られてます

僕の究極の目標は、先入観や偏見というものから人間を解放することです。「俺はロックが好きだからジャズは聴かない」なんて言っている人に、ジャズを聴かせることができれば、もしかしたら黒人に対する偏見を少し減らせるかもしれない。逆にジャズやソウルしか聴かないという人に、ロックやテクノにもこんなに素晴らしい音楽があるよ、と紹介することで、白人に対する偏見から解放することになると思うんです。僕がこの20年間に世界各地でプレイしたことで、日本人に対するイメージは確実に変わっているんです。日本人でこんなDJがいるんだって。正直、日本の総理大臣や外務大臣より、僕の方がよっぽど世界で知られているし(笑)、日本のイメージを変えてきたと思いますよ。逆に、日本に向けてアフリカやジャマイカやブラジルの音楽を紹介することで、いままで知らなかった国にも興味を持って、好きになってほしい。人種や文化に密着した音楽だからこそ、音楽の力で国境や人種や男女の性差までも超越できると僕は信じているし、それができるDJになりたいですね。

8月にはドイツ政府に正式招待されて、ドイツ国内のレコーディング・スタジオやミュージック・フェスティバル、レコード・レーベルなどを視察することになっています。そんなふうには海外では、政府から視察に来てほしいといわれるだけのステータスがDJにはあります。だからこそ、現在の日本でのDJの地位の低さ、クラブを取り巻く状況は非常に嘆かわしいですね。残念ながら一部の店舗で近隣のトラブル、暴力事件などが起こったのは事実です。だからと言って、クラブが全て危険な訳ではない。しかし、文化の発信地としてのクラブを認めてほしいれば、まずはクラブの経営者やDJ達ももっと意識を高く持って、それなりの活動のなかで実証していかなければいけないですね。だから僕は本を書いたり、海外との文化交流なども積極的にこなしているんです。

DJプレイの根底には仏教精神

大学時代には真剣に仏教に向き合いました。卒論のテーマが「トム・ソーヤの冒険」の著者であるマーク・トウェインだったので、彼は晩年ベシズムに傾倒し、宗教に対しては懐疑的な立場をとった人なんです。一般教養の授業で仏教や浄土真宗について勉強しながら、一方でマーク・トウェインを研究したことで、宗教の持つ重要さと矛盾点について自分なりに深く考えましたね。いま、いろんな国を訪れるなかで、やはりホスピタリティという点では日本人ほど素晴らしいものはないと思います。もてなしやおもいやりなど、他人の気持ちを察する文化の根底には、やはり日本人に空気のように普及している仏教精神

があるんじゃないでしょうか。僕はよく外国からアーティストを招きますが、そのときは客人のために至れり尽くせりのもてなしをします。そしてみんな日本のことが大好きになって、感化されて帰ります。僕にとってはそうするのがあたりまえだし、好きなんですよね。自分は先祖や周りの人によって生かされている、という感謝の気持ちがあるからこそ、自然に人のためになりたい、喜ばせたいという気持ちになる。DJでフロアを沸かせたいという思いの原点は、もしかしたら仏教的なものなのかもしれないですね。目の前にいる人をどうやって楽しませるか、というのが僕のプレイの基本にはあります。この人だったらどんな音楽を聴きたいかな、と想像するところから始まるんですよ。

可能性にフタをしないで

僕は10代の頃から海外のアートやファッションに興味があって、『i-D』『The Face』なんていうイギリスのカルチャー誌を読んでいた。でも英語がよくわからないから原文でスラスラ読めるよう、ちゃんと勉強したいなと思って、龍大の文学部英文学専攻に入りました。ちょうどその頃から村上春樹さんのファンで、村上さんがジョン・アーヴィングやレイモンド・チャンドラーをお好きだったことに影響されて、アメリカの現代文学に興味を持っていたというのがあります。また、祖母の家が大宮学舎に近く、子どもの頃から西本願寺にもよく遊びにきていたので、龍大には親しみがありました。自分で言うのもなんですが、大学時代は成績優秀でしたよ(笑)! 3年生までに単位を全部取ってしまったので、4年生のときにゼミの先生に許可をもらって1カ月イギリスに行ったのです。ロンドンで初めてナイトクラブの洗礼を受け、僕の人生を変える大きな契機となりました。出会ってすぐに友達になり、そこからまた新しい文化やアートが発信されていく。そんなクラブ・カルチャーに心を奪われ、日本でもそんなクラブシーンをつくりたいと思った。卒業して22歳で祇園のクラブの店長になり、東京に出て渋谷にTHE ROOMというクラブを立ち上げ、DJ、アーティストとして国内外で活動を始めました。僕は初めから世界でやるのがあたりまえだと思っていたので、アルバムを全世界リリースしたときも、ヨーロッパやアメリカでツアーをしたときも、特別すごいとは思わなかったですね。

いまの若い人は、自分で自分の可能性にフタをしてしまう人が多い気がします。やってみて失敗ならやめればよいのであって、やる前から無理とは決めつけられない方がいい。周りはよってたかって否定してきますから、自分を信じてあげられるのは自分しかいません。僕も散々否定されたけれど、やりたいことは全部やってきました。僕がこの46年間でわかったのは、チャンスは人が持つてくるということ。でも自分が動かないと誰にも出会えない。そう思っているから僕はいろんなところに出かけて行くし、いろんな人に会います。でもチャンスないかな、と虎視眈々と狙っている感じでもなくて、ただ単に人に会うのが好きで好奇心が旺盛なんです。逆にどんなに偉い人でもお金持ちでも、好きでなければ会いません。人や場所との出会いから新しいアイデアがどんどん生まれるので、スランプに陥ったことはないかな。まだ実現できてない企画がありすぎて困っているくらいです(笑)。

◆ みんなの本棚 ◆

『海のイカロス』

大門 剛明 (1997年文学部卒業/ミステリー作家/三重県) 著者
横溝正史ミステリ大賞受賞者が放つ最新ミステリー。クリーンエネルギーの「潮流発電」の第一人者が真摯に研究に没頭しているとき自ら命を絶つ。その裏には多くの謎が。

2013年4月刊/169頁/光文社/1575円



『ぞろりん がつたん』

大門 剛明 (1997年文学部卒業/ミステリー作家/三重県) 著者
横溝正史ミステリ大賞受賞者が放つ新感覚!! 怪談×ミステリー。日本各地に伝わる怪談をモチーフに、昔話と現実世界が交錯する幻想的なミステリー。

2013年6月刊/286頁/実業之日本社/580円



『棟方志功・越中ものがたり』

飛鳥 寛栗 (1939年文学部卒業/仏教音楽研究家/富山県) 著者
2010年龍谷賞受賞者である98歳の筆者が、旧知の板画家棟方志功の人となりと思い出を、越中在住6年余の事蹟と共に語る渾身の一篇。

2013年4月刊/221頁/桂書房/2100円



『肥後藩参百石 米良家』

近藤 健 (1983年法学部卒業/北海道) 著者
熊本藩士を初祖とし、幕末・維新の動乱を経て、屯田兵として北海道移住。そして太平洋戦争に巻き込まれながらも400年にわたり、血脈をつないだ一家譜を超えた歴史書。

2013年6月刊/346頁/花乱社/3990円



『カントリー・ロード』

阪口 正博 (1979年法学部卒業/京都府) 著者
父の転勤に伴って何度も引越しをくり返してきた主人公が、転校先の田舎の中学校で、7人の同級生と一年を過ごすうちに、初めて自分の故郷を発見する。

2013年2月刊/165頁/BL出版/1470円

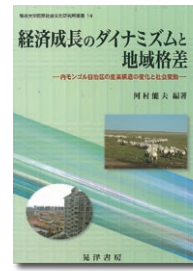


◆ 共同研究活動 ◆

龍谷大学国際社会文化研究所叢書14
『経済成長のダイナミズムと地域格差
—内モンゴル自治区の産業構造の変化と社会変動—』
河村 能夫 (名誉教授) 編著

本書は、2008年から3年間実施された「中国内モンゴル自治区における経済成長と、格差を正をめざした持続的地域社会発展に関する総合研究」の成果で、その目的は、世界的にもみても驚異的な経済成長を成し遂げている中国のなかでも、例外的な急成長を示す内モンゴル自治区に焦点を当て、その地域経済の成長メカニズムと域内格差を析出することにある。

2013年3月刊/247頁/晃洋書房/3600円



『フェートン号別件』

指方 恭一郎 (1985年文学部卒業/僧侶/福岡県) 著者
シリーズ最終巻。長崎に襲来した重武装船フェートン号。長崎の町を守るために町人達が立ち上がった。

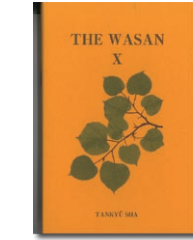
2013年4月刊/252頁/文藝春秋/610円



『THE WASAN X 宗祖親鸞聖人750回大遠忌法要特集号』

瀬川 豊 (1970年大学院文学研究科修了/光尊寺宗徒/兵庫県) 著者・『和讃』翻訳『選択集』編集
THE WASAN X (『選択集 (せんじゃくしゅう)』英訳付出版記念特集号) のメッセージとして、法然上人の「念佛 (ねんぶつ) 往生 (おうじょう)」と親鸞聖人の「信心 (しんじん) 正因 (しょういん)」の内容を明らかにした。

2012年7月刊/403頁/探究社/2310円



『親導 真宗安心要文 探究モダンシリーズ I・II』

瀬川 豊 (1970年大学院文学研究科修了/光尊寺宗徒/兵庫県) 著者・(日本語)
浄土真宗のご安心の難解さを鑑み、『親鸞』の名の下に書かれた書物の多さを恐察し、宗祖のご安心 (あんじん) を出来る限り平易に簡潔にするため、ご『和讃』を中心にして筆を執った。

2013年5月刊/226頁/探究社/2100円



『江戸な日用品』

森 有貴子 (1992年文学部卒業/編集・執筆業/東京都) 著者
江戸の暮らしが、今とつながっていることを日用品を通じて紹介。江戸の町が育んできた、衣食住から味土産までの今欲しい、使いたい日用な江戸モノが、ずらり揃っている。

2013年1月刊/128頁/平凡社/1470円



『保育ソーシャルワーク支援論』

土田 美世子 (社会学部准教授) 著者
本書では、保育所で実施されるべき「保育ソーシャルワーク」の課題と役割について検討。保育所が地域福祉の拠点となるための要件について述べた。一般的には乳幼児のケア施設と考えられている保育所で、ソーシャルワーク支援が必要とされる現状及び支援を進めるべき方向について、日本、カナダでの調査をもとに考察をおこなった。

2012年12月刊/241頁/明石書店/4620円



『寛容と暴力：国際関係における自由主義』

清水 耕介 (国際文化学部教授) 著者
アレントの生の概念やフーコーの生権力・統治性という視点から現代の国際関係を分析した。善き労働者として健康的な生活を人々に強制しながら、社会的な生活を剥奪していく近代に焦点を当てた。国際関係学の言説によって、人々が一定のロジックにより秩序づけられて行く様を描いた。

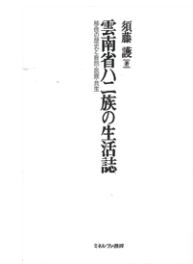
2013年2月刊/278頁/ナカニシヤ出版/3675円



『雲南省ハニ族の生活誌—移住の歴史と自然・民族・共生』

須藤 護 (国際文化学部教授) 著者
中国雲南省の高地に居住するハニ族は、見事な棚田を作り上げてきた民族として知られている。四川省西北部がその故地であるとされ、数百年にわたり移住と定着を繰り返す中で、他民族との抗争と共生、厳しい自然に対応するための優れた知恵が伝承されてきた。現代に生きる私たちが共感し、学ぶ事柄が多い。(なお、ハニ族が拓いた社大な棚田は 2013 年度世界文化遺産に登録された)

2013年2月刊/268頁/ミネルヴァ書房/4725円



『韓国口伝説話集21集井邑山外面編』

朴 炫国 (国際文化学部教授) 著者
最近、生活環境の変化と科学機器の発展で先祖代々伝えられてきた昔話が徐々に消えつつある。2009年夏と2010年の春に二度韓国の井邑市山外面を訪問し、現地の調査活動をした。韓国農村社会が急激な少子化、高齢化などで、ますます説話採録が難しくなる状況に、調査と編集ができたことは意味深い。

2012年11月刊/471頁/民俗苑/2700won



『婚約・婚姻予約法の理論と裁判』

岡本 詔治 (法科大学院教授) 著者
明治時代から現代までの婚約外男女関係 (婚約・内縁など) に関する裁判例を分析して、判例婚約予約法の現代的課題を明らかにすることが、本書の眼目である。ことに、「婚約・内縁二分論」を通して、家的制度下での曖昧な男女関係の当事者である女性の保護に努力してきた判例の歴史的推移をフォローした。

2013年2月刊/676頁/信山社/13440円



◆ 出版助成 ◆

『暮らしに生かす唯識』

楠 淳證 (文学部教授) 著者
本書は、文学部仏教学科が社会還元のために企画した「龍谷大学仏教学レクチャーシリーズ」の創刊号。全八話よりなり、身近な話を織りまぜながら「唯識とは何か、仏教とは何か」ということを一般読者に対して平易な口調で語りかけた書。従来の唯識学の概説書とはまるで異なる、日常の1コマを収めた「唯識の小話集」といってよい。

2013年5月刊/79頁/探究社/368円



『西本願寺と門前町のにぎわい—京都のまちづくりと伝統産業の振興—』

井口 富夫 (社会科学研究所京都地域創造研究センター研究員) 著者
本書は、筆者が社会科学研究所の研究員として活動した成果の一部。京都のゲートウェイである京都駅とその周辺地域の「にぎわい」が、京都市全体の発展にとって必要不可欠であるとの認識に基づいて書かれている。西本願寺門前町は、京都駅北側一帯地域に対応しており、この町の発展によって、京都市が今後の大都市間競争に勝ち残る方策が提示されている。

2013年2月刊/313頁/永田文昌堂/3360円



『沖縄返還と日米安保体制』

中島 琢磨 (法学部准教授) 著者
本書は、佐藤榮作政権期の沖縄返還をめぐる対米交渉過程を、返還を可能とした安全保障上の条件に着目しながら明らかにしている。交渉の過程で見られた、外務省と佐藤榮作首相のバック・チャンネルという二つの交渉ルートの相互関係を、日米の公文書、日記・回想録、関係者へのインタビューなどから分析。沖縄返還交渉の全体像を考察している。

2012年12月刊/iii+402頁/有斐閣/5040円



『地域空間の包容力と社会的持続性』

阿部 大輔 (政策学部准教授) 編著
場的場 信敬 (政策学部准教授) 編著
井上 芳恵 (政策学部准教授) 著者
清水 万由子 (政策学部講師) 著者
平阪 美穂 (地域公共人材・政策開発リサーチセンター博士研究員) 著者
社会問題を空間・プロセス・人材継承の問題として統合的に解決を図っている国内外の事例に光を当て、包容力に満ちた地域づくりの可能性に迫る。

2013年3月刊/287頁/日本経済評論社/4200円



『同化と他者化—戦後沖縄の本土就職者たち』

岸 政彦 (社会学部准教授) 著者
沖縄の「本土就職」とそこからの U ターンを題材に、沖縄のアイデンティティの歴史的な構築過程を、当事者の語りなどから立体的に描いた。結論では、より一般的にマイノリティのアイデンティティについて理論的に分析。詳しくは以下を参照。

http://synodos.jp/newbook/4112

2013年2月刊/448頁/ナカニシヤ出版/3780円



読者のひろば

「龍谷人」のコーナーを毎号楽しみにしています。後輩諸君の活躍ぶりを期待しています。75号には、毎日放送の福島アナが紹介されていました。テレビなどでよく拝見しているので、特に親近感を覚えました。(1978年卒業生O)

龍谷大学を卒業して数十年が経過しましたが、毎号広報誌が届くのを楽しみにしています。あの有名人が実は龍大生であったかと驚くのも、この広報誌のおかげです。テレビを見て、「あっ、この方は確か「龍谷」に掲載されていた人だ」と広報誌を引っ張りだしてびっくりすることもあります。(1973年卒業生Y)

結婚した娘の家に行ったら、「『龍谷』読む?」と手渡されました。毎号、自分の母校のように楽しんで拝読しています。カバンに持ち歩き、学生や卒業生の活躍、学術的な記事を時間をつくっては少しずつ読んでいます。次号も楽しみにしています。(卒業生保護者S)

息子が今年理工学部2年生になります。就職活動の情報はとても参考になります。引き続き最新情報の提供をお願いします。(在学生保護者O)

在学生やOB・OGの活躍の様子を知ることができて、誇らしい気持ちになります。(在学生保護者I)

●お便り待っています。
「読者のひろば」へのお便りをお待ちしています。また、「龍谷人」「専門家に聞く」などへの推薦や情報をお寄せください。いずれも以下のあて先まで。

《プレゼント・お便りのあて先》

龍谷大学 学長室 (広報)
〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67
電話：075 (645) 7882
FAX：075 (645) 8692
E-mail：kouhou@ad.ryukoku.ac.jp

編集委員 新井 潤、安西 将也、生駒 幸子、石橋 良太、太田 由記子、岡本 健資、奥田 望、梶脇 裕二、カルロス アリア レイナルス、木田 知生、佐竹 康輔、芝原 正記、竹村 光世、谷村 知佐子、中尾 覚、西倉 一喜、乗金 悟、藤原 直仁、増田 省三、遊磨 正秀(50音順)

事務局 増田 滋彦/田中 秀樹/田中正徳

広報誌「龍谷」76号
2013年9月20日発行

編 集：龍谷大学編集委員会
制 作：龍谷大学学長室 (広報)
発 行：龍谷大学

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67
電話 075(642)1111 (代表)

龍谷大学ホームページURL
<http://www.ryukoku.ac.jp>

龍谷 2013 No.76

広報誌「龍谷」からプレゼント!

龍谷ミュージアムペア招待券……………10組20名様



ご希望の方は、はがきにご希望のプレゼント名を明記した上で、住所・氏名・年齢・職業・電話番号(龍谷大学関係者は卒業年度・学部なども)及び広報誌「龍谷」の感想・意見、あなたの近況などを書き添えてご応募ください。感想や近況は「読者のひろば」に掲載させていただくことがあります。あて先は左記「プレゼント」係まで。締め切りは12月13日(金)必着。応募多数の場合は抽選で。当選者の発表は、発送をもって代えさせていただきます。

広報誌「龍谷」76号 読者アンケートのお願い

今後のよりよい広報誌づくりのため、同封のアンケートにて皆様のご意見をお聞かせください。

なお、アンケートは、
<https://www.ryukoku.ac.jp/enquete/>
からも回答していただけます。



新刊紹介

BOOKS

◆「龍谷」出版情報◆

- 「浄土和讃―信を勧め疑いを誂める」 林智康(文学部教授) 著者 親鸞聖人の著である「浄土和讃」を解説する。和讃は「和語讃嘆」のことで「ヤウラケホメ」と左訓され、浄土真宗の教えをやさしく語えられている。 2013年4月刊/221頁/探究社/2415円
- 「今を輝いて生きるために」 田畑正久(文学部教授) 著者 仏教用語をほとんど使わず、一般の人に仏の心を理解してもらうように「今を生きる」と題して新聞に掲載した文をまとめて一冊の本にしたもの。 2013年5月刊/182頁/樹心社/1575円
- 「謎の古代豪族葛城氏」 平林章仁(文学部教授) 著者 五世紀にヤマト王権の内政・外交を主導し、倭国王と並ぶ権勢を誇った葛城氏の盛衰と実像を明らかにし、ヤマト王権の実態に迫る。 2013年7月刊/274頁/祥伝社/861円
- 「リフレミングの秘訣」 東豊(文学部教授) 著者 心理療法の重要な技法の一つであるリフレミング(枠組み替え)について、システムズアプローチの立場から考え方を実際を述べた。 2013年3月刊/237頁/日本評論社/1680円
- 「家族療法テキストブック」 東豊(文学部教授) 共著 家族療法の実像を理解しやすいよう「理論編」と「臨床編」から構成された教科書。第3章第1節にあたる「戦略モデル」を担当。 2013年7月刊/351頁/金剛出版/5880円
- 「選択本願念仏集講読」 武田晋(文学部教授) 著者 平成25年度の本願寺派安居の講本として、法然上人の著書であり、浄土宗立教開宗の宣言書である「選択集」を講読した。 2013年7月刊/710頁/永田文昌堂/15750円
- 「稼く経済学」 竹中正治(経済学部教授) 著者 実践的な視点で経済学を学び、合理的な思考法と判断力を身に付ければ、景気の波もパブルとその崩壊も「黄金の波」に変わる。 2013年5月刊/267頁/光文社/1575円
- 「文法と単語から学ぶ基礎英語」 角岡賢一(経営学部教授) 著者 毎週の授業で小試験ができるように単語集を付けた英語教科書。文法と読解文という3部構成。音声CD付き。 2013年1月刊/100頁/成美堂/2100円
- 「エッセンシャル英語入門：語彙・発音・読解」 角岡賢一(経営学部教授) 著者 英語の発音ドリルを中心とした、大学生向けの教科書。スマートフォンから教材の音声を確認することができる。 2013年4月刊/75頁/松柏社/1995円
- 「簿記教本【改訂版】」 井手健二(経営学部准教授) 共著 商業簿記の基礎的内容を紹介。日商簿記検定3級の範囲は、すべて記述されており、一部2級の範囲も紹介されている。 2013年4月刊/163頁/創成社/1890円
- 「エッセンス・センス―倫理学の目を開け」 竹内綱史(経営学部講師) 共著 倫理の「感性」を研ぎ澄ます。家族、労働、正義、差別、宗教など、九つのテーマをやさしく倫理的に語る。読めば「倫理的視点」が身につく入門書。 2013年4月刊/264頁/ナカニシヤ出版/2520円
- 「保険法MAP【解説編】〜消費者のための保険法ガイドブック」 今川嘉文(法学部教授) 編者 損害保険、生命保険、変額保険などについて、利用する消費者の立場から、実務の視点を重視。問題点と解決策へのアクセスを短くするガイドブック。 2013年7月刊/352頁/民事法研究会/2940円
- 「カフェ放送でれれ人と場をひらく映像表現」 松浦さと子(政策学部教授) 共著 ドキュメンタリー監督の下之坊修子さんが市井の人々の映像作品に魅力を見出し、喫茶店や大衆浴場で上映、隣人で鑑賞する「れれ」。市民メディアの短い素敵なストーリー。 2012年10月刊/206頁/発行・ツイソーリユーション/発売・星雲社/1575円
- 「消費者市民社会と企業・消費者の役割」 松浦さと子(政策学部教授) 共著 消費者・企業が能動的な市民社会の担い手になるために、どのような役割を担うべきか。企業・行政・研究者の議論による検討成果報告。 2013年3月刊/195頁/中部日本教育文化会/非売品
- 「天地を拓く」 村井龍治(社会学部教授) 共著 日本の知的障害者教育・福祉を切り拓いた先駆者達の思想と実践。彼らの深い人間愛を著わし、支援者は何をなすべきか、福祉の原点を見直す。 2013年3月/279頁/財団法人日本知的障害者福祉協会/2415円
- 「研究道学的探究の道案内」 黒田浩一郎(社会学部教授) 監修・共編 保健医療社会学、福祉社会学などの研究者をめざす人々のためのマニュアル、調査研究論文執筆・投稿、学会発表など研究活動の仕方と注意点を解説する。 2013年4月刊/320頁/東信堂/2940円
- 「身体化の人類学」 青木恵理子(社会学部教授) 共著 記号でもあり身体的でもある声、インドネシアの二つの社会において、人、精霊及び祖霊との関係を築いているか比較考察した。 2013年4月刊/445頁/世界思想社/5040円
- 「みんないっしょに、がれきの中のスイカ」(絵本) 羽濑了(短期大学部教授) 共著(絵本担当) 「子どもたちはどこに、がれきの中のスイカ」の続編。家も車も大津波に流れていく中、保育園に残したわが子を探しに出たみなこ先生は……。 2013年3月刊/32頁/KTC中央出版/1575円
- 「司法福祉を学ぶ」 加藤博史(短期大学部教授) 編者 矯正・保護(罪を犯した人の更正・社会復帰)で重要なエンパワメントと全ての人が活かされる社会づくりのため、学際的に編集。保護司さん必読書。 2013年4月刊/319頁/ミネルヴァ書房/3150円
- 「ベーシック条約集・2013年版」 田中則夫(法科大学院教授) 編集代表 1976年創刊の「基本条約・資料集」を1997年から「ベーシック条約集」と改名。再構成された編集委員による最新の年次版。 2013年4月刊/1250頁/東信堂/2730円
- 「国際法【第2版】」 田中則夫(法科大学院教授) 共著 2011年4月の初版刊行後、2年間の国際情勢の新展開ならびに国際判例の新動向を踏まえて書き改められた。最先端かつスタンダードな国際法テキスト。 2013年4月刊/512頁/東信堂/3045円
- 「ママと関わる」 中根真(短期大学部教授) 共著 保育者養成において大切にしたい保育・幼児教育の基礎理論と実践を、こども教育学科の教員それぞれの専門分野から解説したサブテキスト。 2013年3月刊/193頁/発行・ツイソーリユーション/1048円

BOOKS

* 値段はすべて税込価格で表示